

いつから私はこの世にいるのだろうか。---- 世界がわれわれを受取り、そしていつか再びわれわれをどこかへ連れて行ってしまふ二つの時間は、書きとめておかれ、そして、程なく忘れられてしまう。けれど心臓は、いつ搏ち始めたかを覚えていない。始まりもなく、終りもないように思っている。しかし、生の大波が我々を高くさし上げ、我々の眼が不断よりも遠くを望み見るような瞬間、人生の最も精神的で若やいだ瞬間にあっては、あらゆる時代の迷妄が遠ざけられて、ひとり永遠の魂ばかりが目覚めるのである。こうして我々は、元々周囲のもの一切と自分たちが一体になっているのを知っている。薄明るい乳呑児の世界から成長して行く子供は、自分がそこから出てきた物みなの世界素材が、夙うの昔に危険にも自分とは全く別のものになってしまうことに気がつかない。子供は、あらゆるものにほほえみかける。同情も恐怖も識らぬ。人と獣[けもの]の輝く眼に手をさしのべ、虎を撫でようとし、火焰を抱こうとするのである。

子供は、いつも自分が世界の中心に立っているのだと思い込んでいるが、大人たちは互にこっそりしめし合わせて、子供にそう思わせておく。どんなに頑なな人間さえも、子供の前には身をこごめる。いや、大人たちが互に厭な想いをする時には、子供のところに遁れて行くのである。誰しも子供から何事かを期待しているようだ。この子供はきっと人間的なものの新しい啓示を意味し、何の変哲もない労働者や市民、あるいはまた相変らずの殿様などには成らないのだと秘かに期待する。子供に誤つことなく気高い目的に向う途を辿らせようとして、世間の人々はあらゆる怖ろしいものや卑しいもの、それどころか一体どういう風にして人間は生れてくるかというようなことまでも子供の前では隠そうと努める。しかし子供は、大人の差出す尊敬や貢物[みつぎもの]を当然のもののようにして受取り、のちになって初めに授けられていた尊厳が次第にまた取り去られて行くのを見て大いに立腹し出すのである。とにかくこの私も、極く小さかった頃、人々がいつも私に示してくれた恭順のありがたさが身にしみていたので、到底それを諦める気になどなれなかったことを覚えている。私に退位を決心させるには、手きびしい手段を用いなければならなかった。

我々の王、ルートヴィヒ二世がシュタルンベルガー・ゼーで溺死されてから、二週間ばかり経った頃だったろう。世間はまだこの珍事の噂で持ち切っていた。私は、この王様の美しさや気違い沙汰、気紛れや莫大な負債のことを色々と母から聴いて知っていた。それで、すっかりこの王様が好きになって、よく心の中で自分をこの王様の位置においてみたりしたものである。父は既に二三月前から、下バイエルンの小さな田舎町ピルスティングに移り住んで医師を開業していた。折しも夏の正午の太陽がこの小さな田舎町の上に懸かり、六週間の間というものバイエルン全土に亡君を悼む鐘の音が、丁度その日も亦正午を期して響き始めた時、私は何処かを遊び廻った挙句ホテルに向って帰ろうとしていた。ホテルの二階が、私たちの住居になっていたのである。この家の壁はつい最近まで汚らしい茶褐色だったが、このごろ白く塗り代えられていた。そしてこの新しい正面の壁は晴れがましく私を迎えてくれるようであった。この壁に眼がとまるのと同時に、強い鐘の音が私の気持を唆[そそ]り立てた。いやそうでなくとも、私には気のわくわくするような訳があった。というのはその前日、面白い発見をしていたからである。せいぜい榛[はしばみ]の実ほどの熟し切らない橡[とち]の実で白いところをこすると、淡い緑色の線どころか、とてもきれいな代赭色[たいしゃいろ]のあとが残り、しかも乾くにつれて色が鮮[あざや]かになり、中々消えずにいるということを全く偶然発見したのである。だが私はこの発見を他人に洩らさずに、これを大がかりに試してみる機会を窺[うかが]っていたわけだった。塗り代えられたホテルの壁は、眩[まばゆ]いほどに白々と光っている。これを何とか利用してみる気にならなかつたならば、めくらと言われても仕方があるまい。ありがたいことには、上衣のポケットにもズボンの隠しにも、

熟し切らない橡の実がはちきれんばかりに詰め込んであった。私は折から通りかかった二人の人をやりすごして、壁の方に進み寄ろうとした。

『御殿があっても、中に王様がおられんというのは、情ないにも馬鹿気なことだね』と一人が言っている。----『滅多なことは言うまいぜ!』ともう一人が親切に答える。----『ミュンヘンじゃ愚図々々いうと誰彼の容赦なく忽ちズドンだ!』---- それ以上は聴く必要はない。それからさき、事は自然に運んだ。橡の実を三本の指でつかみ、力一杯壁に押しつけながら、ポケットを次々と空にして倦まず撓[たわ]まず正面の壁一面に大きな字を書きならべた。この家[うち]は今日から王宮だ、僕はバイエルンの王様だ、というのがその文句である。----『愚図々々言う者は銃殺にする!』このつけたし文句は、私にも少しどぎつすぎうように思えたので、隅っこの方に殆ど読めない位の字で書き添えておくことにした。それから家の中に駆け込み、何かはたいたりゆすいだり片附けたりするものや、お手伝いすることはないかと母に訊ねた。だがとにかく自分の晴着を引っ張りだしてこれを着用に及んだ。不思議に思っただけを訊ねる母親には、『ただ王様の名誉のためなんですよ』と曖昧に答えておいた。部屋の戸が開いた。私はもう、何か素晴らしいもの、私の前にひれ伏すようなものがやってきたんだなと思いついて、出来る限りの恩恵を施してやろうとしっかり身構えていた。だがそれは父親だった。----『下の新しい壁を汚した馬鹿者は誰だ?』---- 父はいつもより蒼ざめている。金縁眼鏡の奥で眼玉がざらりと光る。と、いきなり私の頬にぴしゃりと手が飛んだ。しかしそれでもまだ私は正気に返らなかった。まだ心は抵抗しつづけ、王に向って手を挙げた父親を暗黒の地下牢に突き落とすべき武装した家来を呼び求めた。父も亦これを察して、前よりも強くもう一度平手打ちをくれたので、やっこのこと私は現実に呼び戻されはしたが、それでも心の中ではすべての要求を放棄してしまったのではなかった。

さてそれからやっこの本当の懲らしめがやってきた。私は笞[むち]を持った人垣の間を打たれながら駆[か]け抜けるように、大声で笑っている隣近所の人々や、怒って『陛下々々』とはやし立てる男の子や、意地悪気にしかめっ面をしてみせる女の子の間をすり抜けて、市の立つ広場を横切り、左官屋のシュタインバイサー爺さんのところに馳けて行って、今日のうちに壁を塗り代えてくれ、勘定はお父さんが持つからと頼み込まなければならなかった。

この屈辱は、私の目をはっきりと覚まさせるのに充分の効果があった。けれども、無法な仕打ちにあったのだという気持からは離れることが出来なかった。私は母親に、もうこの世の中がつまらなくなると打明けた。けれども母は私に用事を言付けて気を紛らわしてくれた。それまでも既に度々言われた通りにそれを果たして母親を悦ばせていたものである。仕事というのは、イザールの沼地の方に出かけて行き、洞[ほこら]になった楊[やなぎ]の幹の中に沢山つまっていた腐った部分を掘り出して袋に一杯持ってくればよかったのである。家の花壇は地味が痩せているので、珍しい草花もまともに育たなかったが、この腐食した木屑を与えると精がついて見事な発育ぶりを見せるというので、母はこの黒褐色の塊の貴重で精分のあることを口を極めて誉めちぎっていた。私も亦これを採りに出かける時は、いつも自分が黄金掘りのように思えるのだった。その日もやはりこの仕事のために自分の悲しみを忘れた。むき出しの腕で幹の冷たい土の中をかき廻したり、時によると黒光りのする麝香黄金虫がいて、とてもいい匂いをさせていたりする腐った土を、指の間からさらさら落してみたりするのは、何といっても素晴らしいことだった。仕事が楽しいので必要以上に愚図々々しているうちに太陽は沈んでしまった。横に倒れもしないほど一杯つめこまれた袋の口を締めっていると、自分の身体が平な白い霧に包まれているのに気がついた。自分のまわりはよく透けて見えるが、遠くの方に行くに従って段々と濃く厚くなっている。霧は、丘の上の小さな町のランダウまで続いていた。町の下の方には、いつも時間通りに時折とても強い世間の匂いを残して行きすぎる汽車が往復している。昼間見ると列車は黒ずんでいるが、しかし今は窓に明りをつけて白い霧の被いの上を走り去って行く。その被いの向う側の岸には、ピルスティングの町の灯がおぼろに瞬いていた。私はそれまでこの新しい元素ほど美しく怖ろしい物を見たことがなかった。私はこの上もない孤独感と世にも烈しい生の衝動を感じ

た。エーテルのことが思い浮んだ。どこにだってあるのだけれど誰にも見ることの出来ないものだといつか母が言ったことのある、あの不可解な元素である。けれども私は、父がこのエーテルを一杯つめた青色の壺を一本、自分の薬品箱の中に蔵[しま]い込んで持っているのをちゃんと知っていた。そこで私には合点が行った。これがエーテルなんだ、いま明るい織物のように見えているのは、偶々人の眼に見えるようになったエーテルなんだ。そうしてこれは勿論この世のものじゃないのだ。さて私はこの神秘に清らかなものの中を歩いてピルスティングに帰ることになったのである。もし事もなく帰れたら、もし不可解な方法で死んでしまうようなことがなかったならば、これから先きは世の中が変わったものになってしまうに違いない。又、世間の人々がどんな眼で私を見ようと、そんなことはもう大して重要なことではなくなるのだ。そこで私は袋を肩にかつぎ、大胆に綿毛のような潮の流れの中に飛び込んだ。霧の海は頸にまで達することが殆どなかったのだ、私はずっとこれを見渡しながらかけて行けた。

時を告げる鐘が鳴った。耳慣れた音である。それは隣近所の村々や部落の人たちから羨ましがられているピルスティングの誇りと言ってもよい新しい大きな鐘で、私たちの古い美しい教会にあるものだったが、それがいま私を迎えてくれるのだった。この鐘を作るための基金が募られた時、母は私の貯金から相当の金を割いて、私の小さな喜捨もこのさまざまの幾世紀かの間を鐘の響きに籠もり鳴るようにと寄進したのである。このことを思い出して、今までになく世間とのつながりというものを感じながら、市場にともる灯から眼を離さずに私はどんどん歩いて行った。そして、何処かに囁くような声がしたり、足の下で地面がふわっと下ったりしても気づかぬようなふりをした。それにエーテルの中に身体を浸していることも、靈妙な治癒力を発揮し始めた。血は次第に心地よく循環し出した。その日の午後、あれほど屈辱的に奪い去られた王者の位はいま別のもので償われた。私は、次第に重く肩に喰い入る貴重な土の重荷とともに、言句を絶する広やかな魂の王国を家に持って帰ったのである。

それからのち幾週間かの間はどういうことがあったか、もう覚えていないが、ずっと後になって私が迂闊な荒んだ時をすごした後で静かな仕事に遁れ、遂に文学や伝説や科学の書物のうちに安息を見出すような時には、よくあの夕方に似た幸福を味わうことがあった。その時以来、精神の王国を遍歴することは、いつもあの霧の沼地のさすらいに似ていた。それは、同じように心を軽やかにするものであり、また同じように、我々が臣下であると同時に王者である一つの故郷を恃[たの]む気持を味わせるものであった。

**

文学、伝説、精神の王国！魂がどれほど多くの高揚を永遠なる光の現世的現れの数々から授けられるか、これを正しく評価するには、あらかじめその夢想と欲望とにみちた身体を僧院のような狭い世界の中で鍛えておかねばならぬ。学校で私どもを教えた牧師の先生たちは、本当の信仰を懐いている者、祈りの法悦を識る者には、俗世の空想も歌声も無用だという意見であった。既にこの地上で直接神の姿を觀ようと努める信心深い人々や俗世に背を向けている人々に対すると同時に、あの先生たち自身に対しては、そういうことも通用するであろう。彼等は、万物の中での最高のものに触れようと願っている。彼等は、親し気にはっきりと神に向かってあなたと言うことが出来る。彼等にはそれで充分なのである。しかし彼等ならぬ我々は、人生という大きな芝居の熱心な共演者であり、自分たちに割りふられた役割に固く縛られて否応なしに全体に結ばれている我々、夜の煩惱をも天上の死者と同じように尊いものとし、愚痴も賢者同様に意味ありとする我々---- そういう我々に切ない危急の祈りの恩恵が与えられるのは、せいぜい幕間の僅かの時間にすぎぬ。我々は人生という芝居を止めないために、人間のとどまるところを知らぬ衝動を、麻痺させたり追いのけたりしようというのではなく、変様し美しく鳴り響かせようとしてこれを支配する神的なものの機能を必要とするのである。

私はまだ幼い頃にもう王位篡奪を敢てするような子供だったから、それからのちも落

着きというものがなく物事に対して極端に敏感だったので、たとえ書物を読むにしても自分の修養ばかりを心がけるといふようなことのなかったのは当然である。私は書物の中に引張り込まなければ気が済まなかった。それだからこそドイツの伝説世界にしても、これと接触した抑々の始まりに馬鹿気た事をしてしまったので、私にとっては恐らくこれが一層親密な生の要素となったのであろう。ランツフートの中学校図書室から一冊の本を借り出したが、その色刷り挿絵の一枚に、ブロンドの髪で額に黄金の巻毛を垂らし抜身の剣を手に持った怖ろしいけれども愛らしいクリームヒルトの姿を発見して、たとえようもなくこれが美しく思われたので、彼女と一緒になければ、もう生きていてもつまらないとさえ思った。書物の返却を迫られた私は、ある誘惑と烈しく戦ったが、結局これに負けてしまった。その一枚を破り取って、抽斗[ひきだし]の中に隠したのである。そういうことをすると厳罰に処せられたのだが、巧い具合に見つからずに済んで、誰も私の持物をとやかく言うことは出来なかった。それから幾週間か私はこの盗んだニベルンゲンの女人と人目を憚る同棲を続けた。もし今この妻が突然この世に帰ってきたら、きっとそのぎらぎらする剣で私の首を刎[は]ねてしまうに相違ないといふことはよく判っていたので、それだけ一層この結婚生活がたのしみだった。しかし特別なお祝いでもしようと思った時には、この挿絵をポケット鏡と向い合せに置くことにしていた。そうすればこの女英傑を二人分所有することになるからである。

我々ドイツ人は、恐らく外国人の名前を最も美しく耳に聴く国民であろう。だからこそまた我々は外国の言語を特に愛するのである。私たちの中学校のある先生は、十六世紀の偉大な画家の名前を二つよく口にした。ミケランジェロとラファエルである。私は、三人の大天使の一人をラファエルといい、もう一人がミヒャエルという名前だったことを思い出し、頭の中では忽ちこの偉大な芸術家と翼を持った神の使者とが一緒になってしまった。この二人の中には、男性の力と女性の力とが性を超越した本質となって統一され、ともに久遠の若さに溢れ、あらゆるものを見抜いてしまう明晰な眼を持っているように思えた。さだめし二人は天使の血を引いているのだから、身を隠す力、自分にふさわしいと思われるような者にだけその姿を見せる高貴な権能を持っているに違いないと考えた。私はそののち次第々々に、このいわば隠れ蓑を着て歩くという能力を詩人の上にも移して考えるようになった。詩人は、子供の頃の私にとって、人間の形をしていない声にすぎなかった。突然いずことも知れぬ空中から聞えてきて、ある時は人の心をかき立て感激させ、またある時は警告し脅かす一つの声であった。

十五回目のクリスマスの贈物に、私は丈夫な装幀で煉瓦色をした十四巻のゲーテ全集を貰った。善良な両親は、この贈物によって息子の教養のために何か必須な務めを果たしたつもりでいたのであるが、しかし私にとって、教養などということは全くどうでもよかったのである。最初の二三頁からして既に何か名状し難いものが私を捉え、やがて突き放すかと思うと再び惹[ひ]きよせた。私は何の秩序もなくどの巻にでも手をつけたが、殆どいつも何かしら特に意味深い言葉に着き当った。そして私はそののち幾度もそういう言葉に立ち戻って行った。ファウスト第二部、ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代、植物変態論、西東詩編などの最も幽深で遠い世界の言葉を私は間もなく暗誦してしましたが、しかもそれによってどれほど大変な要素を私の小さな生活の中に受け容れたかということには、全然気もつかずにいたのである。初めのうちは、ただ魔法の言葉の幸福な響きに酔わされて、学校の作文の中に仄めかしてみたりすることによって、そういう言葉の持つ怖るべくして幸福な力を試してみることで満足していた。すると先生は当惑の色を浮べて訊ねたものである。「一体これは何だね？どこから取ってきたのだ？私は知らないが ---」さてこう聞かれてみると、内心の満足感を無邪気な表情の下に隠すのは中々容易ではなかった。子供というものは、恰も他日その獅子の正体をあらわす美しくて若い動物の仔とでも遊びたわむれるように、精神の世界の高貴で危険な事物をもて遊ぶのである。

クロップシュトックやゲーテ、シラーなどの詩に耳が慣れ始めると、早速私は抑えがたい韻律の才に誘惑されて、本当に私の財産になり切らないものすべてを歌い返そうとし始めた。これをとめてくれる人があったとしたら、その人こそ本当に私のためを想っ

てくれる人だっただろう。しかし誰もいなかった。自分の感情を語り、背伸びをしても到底届きそうにない色々の考えを口に出しても、それを妨げる者は誰もなかった。疾うに死んでしまい模範として崇められている詩人たちにだけ導かれ、外国のものもドイツのものも新しい動きなどというものを一切識らずに、私は一つの理想を、壊[え]ちがたい光を信じた。これを地下の礼拝堂の裡深く隠し、私の色々な経験から守らねばならぬと考えた。だから私の詩句が空虚で単調だったからといって少しも不思議はなかった。神聖な光もそれだけでは創造的ではななく、それが人生という濁ったメディウムを通る時に受ける屈折の中にあって初めてひょっとすると詩になるような何物かを輝かすことができるということは、ゲーテやメーリケの詩などのどれを読んでもよく判る筈だった。私も亦、何かそういうことを仄かに感じていた。しかし光が弱かったのか、体験が浅すぎたのかどちらかであった上に、しかも、時代を俱にする偉大な詩人の導きというものを持たなかった。一種の分裂が私の生活の中に現れてきた。私の苦悩や行為は、周囲の人々のそれと少しも区別されなかったが、ただ少し違うところは大抵の人よりも私のそれは烈しく予期し難いものであった。私は心情の迷妄や拘束、無為に陥ったが、それでもまだ自分が特別の人間であるように思っていた。それはただ詩を書くことが不思議なほどやすやすと出来たからにすぎなかったのである。

私は精神の世界と現実の世界を混同し、子供の域を脱した後も残念ながら盲目滅法にあれこれと色々な世界をつつまわったが、これは先生や友達を相当に悩ませたらしい。まともな者にはなるまいという予言は私の青年期をついてまわった。現に、私がランツフートにいた頃養父になってくれた善良で快活なヒルゲルトナーは、後になってから私に向って、君があ頃の予言に反して間違いにならなかったのはありがたいことだと悦んでくれたことがある。

とにかく私も色々に変って、ある時などは作詩熱に代って着実に良心的な書きものを落着いて熱心にやろうとしたことがあった。だがこれもやはり同じ衝動から出たものには違いなかった。私の小冊子『青春変転』を識っている読者は、ある夏のことドーナウの岸辺で成功した魚とりのことを記憶しているだろう。私にはそののち幾月もこの素晴らしい事件が忘れられず、再び中学校に帰って行った時には、一冊の書物を著そうと決心したものである。その中にドーナウの流れに棲む魚族の名前を悉く列挙し、その外観を記述して見ようというのであった。もしあの時、この魚類百科事典に捧げたほどの熱心さの半分でもいいから、学校の勉強の方に振り向けていたならば、私はきっとクラス切っ手の秀才になっていたに相違ない。初めのうち私に判っていたことといえば、その書物の表題と分量だった。表紙には『ドナウ魚族誌』と記されて、頁数は五百頁である。それより多くても少なくてもいけない。さて赤と黒のインキで細々したことを書き始めたとなると、私の知識はせいぜい六頁ばかりで尽きてしまった。そこで私の生涯にとっては未曾有のことだったが、通信をやろうと思いついた。ドーナウの岸辺で知合いになった漁師や農林局の役人、お百姓などという人々は、質問状の封入された手紙を受取ることになったのである。書簡箋や同封する切手のために小遣銭は跡かたもなく消えてしまった。そしてじりじりしながら返事を待っていたが、受取ったものといえば、世間の人たちの関心のない無気力の最初の証拠だけであった。大抵の人はうんともすんとも言わずに貴重な十銭切手を貰ってしまい、恐らくは私を嘲笑[あざわら]ったのだ。宿屋の娘のきれいなアマーリエ・ダンツァーだけは---あの魚がかかったのはこの娘の鉤[かぎ]だった---私の願いを叶えようとして正直に努力してくれた。鯰[なまず]は子供が泳ぎにくるのを待っていて頭から呑み込んでしまう、鯉には鬚がある、鱸[すずき]の背鰭には毒の棘[とげ]がある、**だつ**の頭の骨はイエスが拷問にかけられた時の道具に似ているなどということを私は彼女から知った。こういうことはみんな美しいし役にも立つことだったけれども、五百頁には到底足りないし、その他にも何か失望を味わされた。それがなぜであるかはよく判らなかつた。いやどんなに精確豊富な資料を得たにしても、恐らく私は満足出来なかつただろう。子供が一時の間、夢中になって蝶や甲虫、外国の郵便切手などを蒐[あつ]める気持は、宇宙的な好奇心と言ってよいものなのだ。こうして私も亦、最後のもの、殆ど言い現し難いもの、いわばあの鰭[ひれ]を持った冷たく物言わぬ生物の原像を求めていたのだ。それで、あの岸部に住む若い愛する娘こそ、魚の中

の魚、水中深く棲んでいて、ただ時折選ばれた人にだけ姿を見せる神秘の魚を知っているのだと私は真底から思い込んでいたのであろう。その一匹の魚が私の蒐集中に欠けていたならば、あらゆる苦労は無駄だったのだ。そしてこの手をつけた著述が、後年幾多の私の書物同様に未完成のままになっているのを訝[いぶか]る者はあるまい。

中学校を卒業して、ミュンヘン、ライプツィヒ、ビュルツブルクなどの大学で自然科学、医学を学ぶに及んで、私の創作上の努力も色々な変化を受けることとなった。大学に入ってから講堂や病室で、私の眼に触れる光景はものの半分も理解出来なかったが、とにかく私に強い印象を与え、リリエンクロン、デーメル、ゲルハルト・ハウプトマン、アルノー・ホルツなどのような新しい詩人たちが今や突然私の視野に現れ、模範を示してくれるのに勇気を得て、私は自分の観たものを詩にしてみようと考えた。しかし残念ながら私には芸術家としての素質がなかった。誰の眼にも明かな現実を芸術の鏡に映して輝かしめるには、才能に恵まれた人間といえども、どれほどの修業を、どれだけの心構えを必要とするものであるかを私はまだ知らなかった。そんなわけで私は極端に走った。こうしていわゆる自由詩の形で不気味な解剖学や病気の詩が出来上がった。ところどころはかなりの直観力によって書かれた冗漫な詩句で、死骸が互いに求め合ったり、不可思議な交感作用が起ったりするようなことを書いたもので、当時の友人達を気味悪がらせたり悦ばせたりしたものであるが、彼等は別に羨ましがりもせず、私の詩をひにくった象徴主義風なものだと言ってくれた。しかしそれも長いことは続かず、やがて一つの声がこの邪道から私を呼び戻してくれた。それで当時の試作を記したノートが悉く、ある日紛失してしまった時は、私としてはむしろうれしい位のものであった。今残っているのは相当に大きな幻想詩が一つあるだけである。一人で山歩きをした後に出来上がったものだ。この詩は、医学生生活以外の場所に生れ出たものである。『ステラ・ミュスティカ、痴者の夢』という題で、ストリンドベリイ、ニイチェ、デーメル、モンバートなどの私に与えた一番最初の影響が指摘される。原稿をミヒヤエル・ゲオルク・コンラートの編集している『社会[ゲゼルシャフト]』誌に送ったところが、数日後に詩人ルートヴィヒ・ヤコボウスキイから、短いが心のこもった祝福の手紙を受け、お蔭でこの不恰好な作品も直ちに活字になったのである。さて校正刷がきてみると、全体がよそよそしく余り緊張しすぎているのを感じて、発表したものだろうかどうだろうか躊躇している矢先きに思いがけずも新聞でヤコボウスキイの死を知り、これも何かの因縁だと考えて、校正刷は返送しませんでした。それからずっと後になってから、アルフレート・リヒアルト・マイアーがこの詩を自分の抒情詩パンフレットの歌謡集に収録して発表した。散佚[さんいつ]したものの中には散文で書いた派手な童話も一つあった。気違いになった美しい蜻蛉の冒険をひどく大胆な筆で写したものである。この蜻蛉らしくない蜻蛉は、ある時素晴らしい星の光に出会う。そしてこの星に対して恋の心を燃やすが、なぜともわからず星を裏切ってしまう。そうすると後悔に堪えないで夜毎に星を求めてさまようのであるが、ふたたびめぐり合ったその瞬間、彼女は星のために身を滅ぼしてしまうのである。新しい時代に触れて驚いた魂は、こういう子供じみた想念の中に逃げ込んだのであった。しかし全体に一脈の真実の調子がこもっていたのであろう。直ぐこの童話を送ってやった『ジンプリツィスムス』はこれを採らなかったが、断り手紙には非常に親切に細々と理由が書き並べてあって、将来も何かと御援助を乞うと言ってきた。ミュンヘンの学生時代に書いたもので残っていたのは、この童話だけだったので、紛失してしまっただけからは大いに悔まれた。ところが一方の医学の詩には高い存在理由が欠けていたのだ。なぜなら、裡に多くの光を蔵する者のみがよく暗黒を描き得るだろうからである。

勤勉な生徒として講堂や病院を駆けまわらなくなり、責任ある医師の自由な身として直接患者を相手にし出した日から、本当の変化が行われ始めた。そうなるともう後からでも調べてみる事の出来るような単なる知識は問題でなくなった。人間が人間を呼び求めた。そして、神殿の扉は悉く自ら開かれて行ったのである。

**

二十四歳の折、私は素晴らしい位置にある半島の市パッサウに腰を落着けて開業した。尤も私は内々条件をつけていた。治療の方はほんの片手間にやるつもりで、詩人という天職を果たすことを本業と考えていたのである。どういう風にしてそれがやって行けるかということに確たる成算があったわけではない。ただ一つのことだけは、はっきりと判っていた。即ち、自分の書いたものは誰にでも読んで貰いたい。しかし書いた本人が知られてはならないということである。こういう考えを持っていた私は、私自身の性質が理解出来なかったのであるし、病気の持つ魔力的な魅力を完全に誤認していたのだ。初めのうちは、ある土地に開業する医師の誰をも見舞う運命に襲われた。私の待合室には、他の医者が匙を投げた重患者ばかりが押し寄せてきた。大抵の者は、私が大学で新式的的確な治療方法を学んできたのだと考えて、無理な注文を持ちかけた。また中には、腕の良かった私の父親を識っている者もいて、息子の私を父の経験の相続人だと考えていた。この後の部類に属する患者は一番扱いやすかった。彼等には白いピロカルピン錠を処方してやればそれでもう充分だった。ピロカルピンの包装紙には、父の名前が記されてあったからである。

最初の頃、私の保護を求めてきた患者の中に、非常に綺麗な若い女が一人いた。金糸[きんし]の刺繍をして暮している女で、殆ど眼の見えぬ聾[つんぼ]の母親との二人暮しで、ウンター・ザントの方に部屋を三つ借りて住んでいた。「非常に綺麗な娘」と言っても、それはただ顔だけで、身体のそれ以外の部分が日一日と衰えて行くのに、顔だけは死ぬ間際まで病に打克っていたのである。そのあたりの街の様子や家の恰好は、まるでイタリアのウムブリアにある田舎町からそっくりそのまま持ってきたとでも言いたいものだった。家の下の狭い間口の店には、年がら年じゅう年老いた小さい靴屋が子供に取りまかれて座っていた。というのは、靴の踵に木釘を打ち込みながら、ひっきりなしに口から出まかせの唄を歌っていたからである。じめじめしてひびだらけの廊下から階段が上に通じているが、階段とは言い條[じょう]元々それは梯子だった。これを登るとマリアの小さな病室である。棒砂糖をしぼる紐が、鉤で壁についていて、これが手摺りの代りだった。けれども窓からの眺めは本当に素晴らしいもので、向う岸の高地に聳えるナリアヒルフ教会に臨んで淙々[そうそう]と流れる灰緑色のイン川が見渡され、教会のティベット風に彎曲した塔の円屋根は窓から見える町と郊外の風景をぐっと引立てていた。しかし娘の顔立ちや気性を見ていると、ラテンと古代バイエルンとの遠い霊の姿が渾然と融和して現れているように見えた。そして、この娘の周囲に立ちこめている間近に迫った死の怖ろしさはその人なつっこい容子にかけ代えのない価値を与えていた。大体この娘はありとあらゆる医者の治療にもう全く飽きあきしていたのだが、名親にあたる人が彼女の意に抗[あらが]って私の診察を求めてきたのである。しかし彼女はこの不意打ちに遇っても不快の色を見せず、飽くまでも親しい態度で振舞ったが、それでも一番最初私を一寸試験した。というのは、心臓を診察した時、私には鼓動が聞えなかったのである。左肋骨壁のリズミカルな動きも見られなかった。よくよく聴診して初めて、微かに離れたところから動悸が聞えてきた。---- 「一体どこに心臓を隠してしまったのです？」と訊ねると、彼女は笑って答えた。「御聴診になれば先生にも聞えるっていうことだけは今判りましたわ。この前の先生は、私の心臓が右側にあるっていうことが中々お判りにならなかったのよ。」---- ずるい娘は、異常体質の生れつきで、身体の中の器官が普通とは違って肝臓が左に心臓は右にあったということを黙っていたのである。この一寸した仕事熱心なところがお気に召したと見えて、それから全く私を信頼するようになった。私が感染するのを懼れていないということも、それから後は大いに徳としているらしかった。人に訴えることもなく次第に身体の破滅して行くこの娘は、静かに明るく忍苦と衰滅の物悲しい国へと私を連れて行ったので、私もその国の物悲しさを長い間感じないほどだった。知らぬ間に私はそこに根を下し、全力を挙げて死の国の中に働いていた。残念ながら私の努力は、他の場合には効果があっただろうが、この哀れな娘には左程効き目がなかった。どんなに手段を尽しても、それはただ娘の苦しみを和らげるだけのことにすぎなかった。勿論、容体は幾分良くはなかったが、娘は自分の病状をよく心得ていたので、宥[なだ]めすかすようなことを言うと機嫌を悪くした。娘は死というものを、どうあっても手放したくない大きな素晴らしいことのように考えていたのである。永生きがしてみたいなどと言うこともありはしたが、それはただお世辞に

言うだけのことだった。経帷子[きょうかたびら]もずっと前に縫い上げていた。それに三日目毎に懺悔を行い聖餐を受けた。臨終の時の心構えのために町の牧師が訪れてくる時が一番たのしそうで打ちとけていて、世間囁などにも自分から進んで加わるようだった。暫くすると彼女は面を赧らめながら、私の診察を拒んだ。何時もいつも先生に私みたいな見っともない骸骨をお見せするのは厭だ、死んでしまえばこの怖ろしい身体ともお別れだろうから、それだけでももう死ぬことが嬉しい、と言うのである。

最後の日が迫るにつれて、彼女は度々呼吸困難を訴えて、どうにかしてくれと願った。そしてお喋りになり、色々なことを訊ね、これまでの私の生涯のことをすっかり話してきかせてくれと言う。既に大いなる沈黙への入口の扉に立っている人間に対しては、たしかに一番容易に一切を打明けることが出来る。けれども、私の懺悔は彼女を少々失望させたい。私がもっと冒険的な青年時代を過したのだと考えていたのであろう。その御礼心もあったのか彼女は、私に間もなく結婚するようにと勧めてくれた。そうしないと女たちに身を滅ぼされてしまうというのだ。どういう風な女を私にめあわせたいかもはっきり言った。まず丈夫な人でなければいけない。けれど目立って美しくってはいけない。気さくで、動物を可愛がり、ピアノかヴァイオリンの弾けるような人、そういうことが彼女の要求する主な条件だった。「あしたはわたしのことも何かお話ししましょうね。」別れぎわに彼女はこう囁いた。しかし翌日診察に行くと、もう口も利けず、手を動かすこともならないような容体になっていた。唇を動かし物言いたげな眼差しで、私と母親とを交々[こもごも]見ていたが、最後にはほほえもうと努めた。そうしながら、目を半眼に見開いたまま眠りに落ちて、再び醒めることがなかった。

それから後の幾週間かは、自分が急に老けたように思われ、また色々な点で変わってしまったように感ぜられた。私はあの優しい娘によって永遠に死者の大きなまどいに縛りつけられたような気がした。こうして新しい人生の空間が出来上がった。しかし私もやはりこの空間に属するものだろうか、という不安な問いをどうしても抑えることが出来なかった。自分が医師の責務を果たして行けるのだと考えている間は、この問いも左程苦にはならなかったが、しかし一寸躓いたりすると、いつでも私の内部に隠れている詩人の心が私に警告し、お前は間違った途を辿っているのだと責めるのであった。芸術の労作は、芸術家を孤独にし自由にする。余りにも自分に不似合いな状態に入り込んでしまったと感ぜられるような場合には程なくそこから逃げ出す権利を与えるのもその労作である。だが医者とはそうではない。医者の仕事は彼を人間から距てるようなことをしない。もし人間を逃れたならば、それは彼を信頼する病気の人々に対する裏切りだと言ってもよかろう。そればかりではない、医者は殆ど会う人毎に大抵は自分の手を必要とする病人を発見しなければならない。こうして悲劇的な情勢が展開されたが、仕合せにも私はそれを完全に見渡し得なかったのである。もしそうでなかったならば、この情勢を徹底的に改めるには私の全生涯を費やしても猶足りないだろうと言わなければならぬところである。

多くの場合、ある患者の病気そのものよりも、その人間の全体的な外貌の方が私に強く働きかけてきたということも、当時の私の、欠点の一つだった。私は余りに内気で臆病でもあったので、自分から治療の指導を断念してしまうようなことも一度ならず起った。イン河の向うのホテル・ジレーネ館に、若い金銀細工師が一人住んでいた。既に私の父の原簿に「結核の疑いあり」と記入されている男だった。丁度マリアの葬式があった日に、呼ばれてこの男を診察に行った。この男がマリアを想わせるのは、どちらも手仕事をしているからばかりではなかった。病気は肺よりもむしろ左脚の膝関節を浸していた。関節は第一回の診察の当時、もう非常に腫れ上がって紡錘形になっていた。三度、四度と診察するにつれて、この有様では荒療治をせずには済まされないことが判った。当時まだ光線療法は行われていなかったので、私は思い切って、私の手には負えないから誰か外科の人に診て貰ってはどうかと明けた。私の言葉は残念ながら、患者に愚図々々言わせないような命令的な形式を採らずに、疾しい良心を隠し了せぬ新米の困り切った躊躇の色を見せていた。若い男は、医者心の裏を即座に見てとった。私が慰めの言葉でもと思っとうろろうしている間に、彼はゆっくりと私に言おうとする考えを纏め上

げた。暫くの間は私の方に眼を向けずに掛け蒲団の上に指で何やら書いていたが、やがて絶望的に頭をふり、ハンケチでいつも薄すら汗を浮べている額を拭い、とうとう考え抜いた小さな演説を始めた。私はこれに納得させられはしなかったものの、やはり狼狽した。こういう時はあなたのお父さんのことを思い出さずにはいられない、と言い出すのである。お父さんの永遠の安息に神さまの御加護がありますように。もしあの方が今も生きておられたならば、これほど他愛もなく匙を投げるようなことはされなかつただろう。こう言って彼は期待するように黙って、私につき最近他界した亡父を痛ましく思い出させたが、突然再びこう言い出した。あの方は御自分のお薬で、こんなちっぽけな膝の張れ物どころか外にも色々な病気を治して下さった。結核についてあの方が書かれたものを注意深く読みさえすればよいのだ。そうすれば、医者の方で病気を不治だと考えるからこそ沢山の人間が死んでしまうということが程なく判ってくるだろう。それから彼は私の父親の書いたものから文句を引いてきて証明したが、その文句は彼自身の場合には惜しいことに全然当嵌まらないものだった。彼は父が疾患部に対するピロカルピンの効用について書いた小論文を殆ど諳[そら]んじていたのである。突然彼はその手を私の手の上に置いて、暗い熱っぽい眼で私を見詰め、囁くように打明けた。「まだ二週間にもならないのに、もう効き始めましたぜ。まるでちっぽけな悪魔のように膝小僧の中を暴れまわっています。悪い毒が喰いとめられ、吸い上げられているのがとてもよく判りますよ。あの本に書いてある通りでさ。こういうありさまをよく御覧になるのは、お若いお医者さんにはきっと面白いことでしょうよ。元気を出すんですよ。ねえ、先生、自信を持たれるこった。」彼は微笑と共に叫んだ。「ゆっくりでも、必ず目鼻がつきま

あ。」

こういう話や、またそれ以上に快活で落ち着いた話しぶりに出会って私は口が利けなかった。こういう猛烈な組織の破壊に対してはどんな良薬だって何の足しにもならないということを、率直に言ってやるにはどういう手段を採ったらいいか判らなかつた。だから、まあもう少々様子を見ようと約束した。即ち成行きにまかせようと思ったのである。その次ぎに行ってみると、彼は大変忙しそうにしていた。寝台の脇の小机には、ピンセットやブリキ鋏や細い銀線などが置いてあって、指に金属板の装飾品をつまんで仕事を始めており、暫くせわしそうにひねりまわした挙句、やっと私に挨拶した。どうにも仕様がなかつたのだ。日増しに力がついて行って仕事がしたくて手先がうずうずしていたものだからと言うのである。こんな風に彼は今改めて私を吃驚させた。陰気な広い階段を上って彼のところに行くたびに、私が診察しても無駄だということを説明しようと決心するのだが、しかしやはり彼の方が強かつた。いつでも私が手袋も脱ぎ終らぬうちにもう色々と快方に向う徴候を数え上げて、感謝や悦びの言葉で私に口を利かせなかつた。実際に本気でそう思っているのか、自分を偽っているのか、私にはどうしてもこれが見抜けなかつた。だがもしも単にメスを怖れる余り私や自分自身に対して喜劇を演じているのであつたならば、彼の芝居気は相当本格的なものだと言わなければなるまい。殊に私が患部の診察を求める時には、一層これがひどかつた。時によると私の要求が聞えぬふりをしてしまうこともあつた。しかし私がそれを繰返すと、非常に嬉しそうな様子を見せながら、ゆっくり布や繃帯を取り除け、目立って速く脹れの引いたことや関節が日増しに自由に動くようになったことなどを心から驚いたというような言葉で言い立てて、回教の托鉢僧みたいに私の気持を籠絡しようとするのである。それでいて撫でさする魔法使いじみた見事な手の動かし方をして患部をすっかり見せまいとする。時には彼の老母が側にいることもあつたが、その母親は彼に言わせれば一番病状をよく知っている証人なのであつた。老婆は彼の言いなりに患部を眺めて、声高に彼の感謝の言葉にばつを合わせた。こういう光景は滑稽でもあり、また不気味でもあつた。それで終いに私はこの二人のところにいる時は芝居でも見ているような気になってしまった。そして、このぶざまな皮膚の緊張のために蒼黒く光っている関節が猛烈な勢いで本当の怪物に変わって行ってしまうのはよく判っていたが、苦勞してこの芝居に梟[けり]をつけてやろうという気がなくなつた。私は患者の望むがままに、その有難がつている錠剤を与えつづけ、傍らイチオールとヨードの塗擦[とさつ]や粘土を熱く溶かしたのをかけたりする処置を講じたが、私はそういう治療方法のどれに対しても同じような感激した讃辞を浴びた。

こんな風にして、手術で助かる時期も過ぎてしまった。衰弱が目立ってきた。それはよく判っていたが、麻酔をかければそれっきりになってしまうほどであっても、とにかくまだ生命はあるのだからと自分に言いきかせて、良心を押し殺していた。患者はふえて行った。それに大抵の場合、万事が順調に運んだ。この若い金銀細工師が私にどれ程多くの教えを絶えず授けてくれたか、どれ位沢山の患者がこの一人のために正しい治療を受けることになったか、私は当時殆どこれに気がつかなかった。実際、困難な場合に出会った時には、彼に対してだけは持つことの出来なかった断乎たる態度を即座に採るためには、ただこの男のことを念頭に思い浮かべさえすればよかったからである。しかし犯罪者が度々犯行の場所に足を惹かれるように、それ以来私は益々頻りに彼を訪れ、大抵は長いこと彼のところにいた。私は彼のために処方する薬の中に、快感[オイフォリイ]を起させるようなものを混ぜ始めた。やがて彼は心地よい軽やかな雲につつまれた。次第に無意味な膝の診察が彼には大きな苦痛になり始めた。だが診察を次の週からまた次の週へと延ばすための具合のいい口実が見つけ出され、終いには二人が言い合わせたように、もうその不幸な足には触れないことにしてしまった。間もなく私たちはただもうお互いに人間同士として向い合うようになった。私はその時になって漸く、何かを彼のために尽くしてやれることが出来るような気持になった。話題は他愛のないものになった。マリアの時と同じように、私は他処の診察を手早く片づけて彼のところにゆっくりと座る時間を作った。彼は少しばかり自然科学のことも知っていたので、私が話をしてやったり、本を以て行ってその知識を増やしてやると大層嬉しがった。これが当り前の場合ならば、靴の紐を締めながらも大急ぎで『医学会談』(有能な医者が四人で簡単明瞭に一番重要な病気について語り合うところを書いた非常に重宝な医家必携書)の一節を読んでから患家に出かけるという段取りだったが、ジレーネへ行くまえには大急ぎでヴィルヘルム・ペルシュの一節を読むようなことになってしまった。私の友だちは火山、殊にヘルクラヌウムやポンペイの埋没、その他彗星、光年、猛獣、毒蛇、また死後の魂の生活などの話に最も好んで耳を傾けた。この問題は彼に色々なことを考えさせたのだ。彼には、人間がこのままだこかへ消え失せてしまうことがどうしても信じられなかった。絶望的に永遠の生命や、両親兄妹とめぐり合うことに対する自分の権利を固執していた。彼はよくここに話頭を転じた。彼がどれほど熱心に、教会で厳かに約束されたことを医者に保証して貰いだかっているかがはっきりと判った。私は何処かで読んだ論文を一つ思い出した。その全部は覚えてはいなかったが、私の孤独な懷疑家を幾分なりとも元気づけることの出来るようなものが、その論文の中には二三あった。私はこう説明してやった、全く有難いことに無味乾燥な唯物論が遂に退却して、今では高尚で狂いのない神智学という学問がある。それでこの学問によって、我々がこの地上の肉体の他にもう一つの肉体を持っている。それが即ちエーテルの肉体だということがこの上もなく明瞭に証明された。第二の肉体は宇宙永遠の萌芽力と結びついているから、不滅であって、幾多の純化や星をへめぐったのちに再び自分のものであるところの本体に出会うのだ。さてこういうかなり出たらめな説明が病人に対してどういう影響を及ぼしたかは、確かめられなかった。とにかく以前よりも落ち着いてきたように思えた。しかし彼は恐らくそういう話をするのはいけないと感じたらしい。その後はとにかくそういう種類の質問は一切差し控えていた。次ぎに出かけて行った時、掛け蒲団の上にトーマス・フォン・ケンペルの『クリストの後継者』が一冊、置かれてあるのに眼がとまった。だが私は用心して再び例の問題に触れなかった。一人の人間が持っている信仰をぐらつかせて、しかもその代りのもっと美しい信仰を与えてやれないということが、どんなに間違ったことであるかを悟ったのは、それからずっと後になってのことだった。

彼は薬を忠実にずっと呑みつづけた。たとえそれは病気を癒さなかったにしても、そのため彼は随分長い間持ち堪えた。冬になった。母親は患者の小部屋を十分に暖め、とにかく出来るだけ楽に死なせてやろうとした。時によると半開きの窓から小鳥が飛び入って、机の縁にとまりそこに撒いてある大麻や日輪草の種をついばんだ。灰色で頭の黒い比丘尼[びくに]山雀、嘴は性急[せっかち]にもものを突つのでよく鑿[のみ]のように鋭く研ぎすまされている。サファイアのように輝いて鋭い小さな鼠みみたいな顔をした青山雀、自分の秘密の貯蔵庫を満たすために一度に五つも六つも穀粒を運んで行く五十雀[ゴジュウカラ]、私はそういう小鳥をみんな彼に教えて貰って知った。家はマリア・ヒ

ルフの丘の麓にあった。丘の後にはオーストリアとの国境の線が走っていた。そこにいると、すぐ上の方に異国風で帽子の縁のようにそりのある尾根を持った白い黄色い角のある僧院の建物が見えた。それはスヴェン・ヘディンの西藏[チベット]物語の風景を思わせた。それに実際不思議なほど病人はこの背景によくうつった。殊に夕方になると顔つきも本物のタチ・ラマのようになってくる。あの神秘に満ちた国最高の僧侶の統治者によく似ていると言ってやると、病人は決して悪い気持ちもしなかった。花崗岩の突き出た間を鉄の手摺りのついた階段が険しい丘を上っている。そこを、金縁の黒い書物を読みながら若い牧師たちがゆっくり昇ったり降りたりしていた。また時によると、遊山に出かけた連中が、オーストリアの強い酒に酔いしれて千鳥足で町に帰ってくるところも見えた。私の友人で詩を書くハインリッヒ・ラウテンザックもやはりそういう連中に加わって町に帰ってきたこともあった。黒いフロックを着ているので、遠方からでも彼であることが判る。それから手を盛んに動かしているのは、また新しい詩でも朗読しているのだ。そういう時にはいつも私の心は重くなった。あの男こそ、私が秘かに常に想い望んでいるような生活をやっているのだ、と考えずにはいられなかった。仕合わせな彼は、朝眼が醒める時、今日一日も己のものだと自分に向かって言えるのだ。誰も彼だけの暮し方を妨げることなく、靈感の命ずるがままに生きて行けるのだ。長いこと彼はミュンヘンのキャバレに出ていて、「十一人の死刑執行人」中の『獄吏』の役を演じてよく人に知られていた。けれども今は、初めての本物の名声が彼をつつんでいるのだ。ベルリンの劇場は彼の処女作の喜劇を上演したし、またアルフレート・リヒアルト・マイヤーは彼の詩を蒐め始めた。ところがこの私ときては、もの悲しい病人の傍に座り、彼等を癒してやることもならず無駄話をして暮しているのがであった。

ある朝、若い金銀細工師は死んで寝床に横たわっていた。母親の白状するところによると、一昨日の晩、左足全体が痙攣して非常に苦しんでいたが、それでも私を呼びによこすことを禁じたのだそうである。この痛みは足が治って行くからなんだ、それにそういうも先生にお手数をかけちゃ申訳けない、先生をそっとしておいてあげよう、どのみち土曜日になればお出でになるんだから、と言ったそうである。そのうち痛みも引いていつになく元気が出てお喋りをし、それどころか少々乱暴の風もあったが、ただいつも時間を間違えていたという。もうすぐに土曜だからということばかりが頭にあつたらしい。「峠を越したんで先生はおよろこびだろう」と言いながら、真昼間だというのに灯をつけようとするのだが、どうしてもマッチの火が蠟燭の芯に移せなかった。母親も気味が悪かったけれども、よもやこう急に死んでしまおうとは思わなかったと言った。

母親の言葉を聴いていると、すぐあの侍医の話が思い出される。彼はバイエルンのマクシミリアン王と毎日将棋を指すほどの間柄にあつたが、ある朝のこと国王陛下が御不例にわたらせられるというので謁見を許されなかったのだ。しかしこの善良なお袋さんは、自分の息子のやさしい心づかいのうちに、私の医師としての腕前に対するどんなに峻厳な批判が含まれていたかに気づかなかつた。遺骸のあるところへ私を案内しながら、彼女は涙ながらに私の尽力を謝した。しかし再び私には自分の態度全体の不十分であつたことが苦しく想い返された。私は自分に言いきかせた。己は最初から彼の側に立って、自分の碌でもない教科用の知識などはあっさり諦めて、彼の子供臭いほどに熱心な私の治療手段に対する信頼をそのまま黙って受取りさえすればよかつたのだ。そうしていたなら、あるいは期待されていたような奇跡が行われたかもしれなかつたのだ。----市の男女が多数加入している第三組合の一員として、彼は黒い僧衣を身に著け、合掌した手には銀のクリストのついた黒十字架を持っていた。そういう姿は、不断よりも余計に西藏の書物で知っている東洋の神そのものようであつた。死によって初めて与えられた半ば僧侶風の衣をまとい叡智の微笑を浮べて横たわっている様を見て、私の後悔の発作も失われて行つた。彼に対する私の関係は、何か純粹なもの、完結したものとして私の前に横たわつた。彼が人知れずその運命と如何に戦つたかということは、ただの一度も洩らしたことがなかつた。

彼はいつもただ私に悲しい想いをさせまいということばかりに心をつかつた。私を失うまいとして色々の苦しみをひたかくしにかくしていたのだ。私の手にかかっても治るまいということも、夙うの昔に判っていたのだ。だから彼を私に結びつけたものは、医師

に対する信頼ではなかった。しかし私は、彼の世間に通ずる唯一の橋だった。そういうことを私はあの静かな数分の中にしみじみと感じた。私はしきたり通り、聖水を湛えたカット・グラスにつかっているしろべの小枝を執って、三度死骸に水を振りかけ、死者の老母に、この思いもかけぬ急激な死の原因らしいものを手短かに説明した。

帰り途、私は出来るだけ早く医者という職業から別れてしまおうと今新たに決心を固めた。しかし私は他ならぬこの死者が同じように病に苦しむ沢山の人々に向ってどんなに私を褒め上げていたかを全く知らずにいた。息子をなくした母親は、市場や路地で盛んに私の腕前を誉め上げるので、息子がまるですっかり治り切ってしまった状態で死んで行ったというような印象を他人に与えたのである。そこで患者は日増しにふえて行くばかりだった。大抵の場合は父親譲りの方法が見事に功を奏したが、時にはそれではどうにもならぬことがよくあった。私は色々と新規なことを試み、自分独特の手段も採ってみた。肺が相当に侵されている場合には出来るだけ咳嗽[がいそう]を減少させて胸腔の安静を保ち、心臓の弱った徴候の現れぬ以前にこれを強化することが肝要だという事実は、無数の観察によって確められた。真紅の花をつけるジギタリスの極く小量を何かの麻酔薬の相当の量に混入して、それを数週間連服させた。そして屢々このために治癒への道が拓かれるのを見た。

ある時は抵抗しながら、ある時はまた退きながら、私はこうして次第に悩める人々の領国深く入り込んで行った。私は次第に成行きに身を任せるようになった。町の社交的な交際[つきあい]は避けたが、そのために結局自分を害[そこな]うばかりだった。というのは程なく、私の交際というものが抑々ただ病人、いやある意味では既にこの世を去った人々にばかり限られているということが判ったからである。墓地の中を通るようなことがあると、そこには私の手にかかってもう死んでしまった沢山の人々の、墓石に刻まれた金文字の名前が、私に向って輝きかけてくる。私はそういう人々の曾ての生活を底の底まで知り抜いていたのだ。後に町の中を歩き、今はもう健康になって立働いている市民たちの名前を玄関さきで見かけても、それは何の感慨をも呼ばなかった。そういう人たちこそ、私の眼には本当の死人として映った。外から眺めると私の生活というものは、自分がこの世のものならぬ物の怪を交っているのにどうしてもそれに気のつかぬ呪われた人間の不気味なものに相違なかった。支那や日本の嘶には、美しくも怖ろしくそういう人間のことが語られている。

けれども魂のこもった青春は、決してそうたやすく滅んでしまうものではない。私が常に他人の容体に対して責任を持ち、自分自身を甘やかしてはならぬということだけでも既に治癒的だった。その上、何か特別のものが、私の身体を吸血鬼から護ってくれたらしい。そしてこれは、結局私が生れ持った空想の力だったのだ。即ち、極度に緊張していて、絶えず場面を変え、あるいは奉仕と思索とに、あるいは陶酔、悲哀に身を捧げ尽す生活が私を理解し難い錯覚のうちに保っていた。というのは、そういう場合、私はいつも詩人として生活しているのだと信じていたのである。私は自分の医業をそう大したものとは思っていなかった。患者が私に礼を言ったり私を賞めちぎったりするような場合にも、私はむしろ、患者の心臓の鼓動を聴診し呼吸を診察している間にどんなに素晴らしい詩句が私に近づいてきようとするかを私の顔つきから彼等が読みとるからなのだと考えていた。

しかしどういった精神的な炎も、抒情詩人のうちに燃えているやさしい明るい炎ほどには素早く外部からの照明に打消されるものはない。劇作家や小説家などはよく彼等自身よりも一段と無分別もしくは過大にその人物を描き出さねばならぬことがあるが、歌謡や讃歌の作者はいつもただ自分の最後のもの、最高のも、最も深いものを、いつもただ自分の存在のエッセンスを我々に贈るのである。詩人というものは、熱い空間に移し置かれてエーテルの油液を蒸発させてしまい、そのために自分が枯渇するかどうかを問うことのない植物に似ている。時たま私の親しい幼友だちが問合せてくることがある。しかも詩の方は幾週間か幾月か経っても漸く二三節しか書けていない。そこで私は叱られ、罰すべき心の懈怠を責められるはめに陥るのであった。悲しい気持で私はそれを受

取りはしたものの、やはり自分は詩人なのだという気持を決して失いはしなかった。ある種類の魚は、全く当り前の褐色の鮒[ふな]のように見え、ただところどころにその鱗が赤味を帯びて光っているので、素人ならば決してそう思いはしないのに、その道に明るい人だけはそういう魚も金魚の中に数え挙げざるを得ないのであるが、私にはその程度で一向に差支えがなかったのである。一人の偉大な詩人がその素晴らしい金属を私に鳴り聴かせた時は、一層私は幸福に感じて、自分の苦痛などは安んじて暫くの間は忘れてしまうことが出来た。私はシュティフターの『アプディアス』を、若いホフマンスタールの作品と殆ど同時に初めて呼んだ。私の感動を更に伝えて行くことの出来ぬ孤独の人々の唯中であって、私は自分一人だけで長い間そういう響きを立てる幻像を夢中になって身のうちに守りつづけ、遂に魂はその電気のエネルギーで充たされる---- もともと私は国々の境界線をいつも強く感じていた。それで、マリア・ヒルフの丘を超えてオーストリアの方に住んでいる患者のところへ出かけて行く時には、私はよく心をときめかせて想ったことだった、お前は今、モーツアルトやグリルパルツァーやシュティフターの故郷にいるのだ。そしてお前がこの道を更に遠く進んで行くならば、いつかはあの魔術師---- 冒険者と歌姫を、小さな世界劇場を、騎手の話をその他多くの不滅の詩句を書いた魔術師の家の前に立つことになるのだ。こう思うと、雲も丘も家々も、境界柵のうしろの土地とはいつも少し変わったもののように思われてくるのだった。

*
**

勿論、外国の至福な魔神[デーモン]たちも、私の日々の義務を妨げるということは少しもあり得なかった。私の妥協性やその他の欠点もそういう魔神たちの力でなくなってしまったわけではなく、純粹に自由でありたいという決意を日々新たにしていたにも拘らず、私は時が経つにつれて結局奇妙な状態に落ち込んで行った。その状態を判って貰うためには、夢を描くようにして語らねばならなかっただろう。その頃、私はある女の患者のところと呼ばれて行った。それ以前のどんな患者とも較べたくないと考えたほどに、外貌といい人となりといい、ぴったり私の気持ちに合うひとだった。その患者の傍にいと、これまで私がどんなに遠く自分の本当の意欲を離れてさまよっていたかということが、いつも轟々[ひしひし]と感ぜられるのであった。若い娘は重態だったが、まだ全く絶望的ではなかった。だが私は二度三度診察した後にはこの意見を棄ててしまった。そして、この娘は繊弱な身体なのに仕事のために過労に陥っているので、しっかりと生きて行くためにはただ少しばかりの養生が必要なのだと深く信ずるようになった。私たちは結婚し、田舎に引移った。そしてこれがまた私の健康回復の緒口[いとぐち]になった。

パッサウ時代の手記を纏めてドクター・ビュルガーの日記が出来上がったが、しかしこれは完成されぬままに、その後の幾年間か手許に保存されてあった。この短篇の主人公である若い医者は最後に自殺してしまうことになっているが、私自身にもこの結末が十分に根拠づけられているものと感ぜられなかったに相違ない。そこで私は遁走という詩を書き始めた。詩の形式をとった独白で、これによってあの自殺の意義が失われた。これと相並んで小さな詩がいくつか出来上がった。こんな風にしてそれからの数年は、緩慢ではあるが次第に清純になって行く創作がほぐれて行った。すると程なく周囲の幾人かの人々が、多くはそれとは識らずに良い援助を与えてくれた。元々この告白書の意味は、そういう人々に対して感謝することにあるのだ。私は、筆が自然に手から落ちる時まで、この告白を続けて行こうと思う。

「過去のものの中に優れたものは生きている」とゲーテは言う。事実、我々が個人的に愛し神聖視している一切が散り砕けてしまう日がきたとしても、聖書やカレワラ、シェイクスピアやゲーテなどは依然として存在を続けるであろう。---- それだけのものが残っていさえしたならば、どんな時にも新しくやり直すことが出来るに充分である。とはいっても、そういうもの一切と雖も、同時代の人々が果たす役割を無用になし得るであろうか。人生とは常にただ一定数の人々だけが招かれている一つの出会である。

そしてこの招待は二度とふたたび繰返されるということがないのだ。賓客のすべてが、顔を見合って知合いになるということは不可能である。けれども彼等は、自分たちを一つの塊りと感じている。---- 現に我々は、生年を同じくする者すべてに対して既に一種の共感を持っているのではないか。過去の如何なる巨大な精神と雖も、我々と一緒に同じ星辰の動きの下に生き、人類発展の同じ段階に結合されている人間の示す直接の息吹き、愛憎、思想と予言とを代用することは出来ないのだ。私の敵すら、やはり私に属する。そして、私を殺す者は、永遠に私の姿と結び合うのである。

私を僻遠の地に住むように定めた運命の導きは、当時大都会でかたちづくられていた精神的な諸団体を私から隠してしまった。しかし、私を純粹に保ってくれることによって、運命は幾分その償いをつけてくれたのである。リリエンクローンやデーメル の詩によって感激せしめられると同時に、私はゲオルゲの『生の絨毯』によって覚醒され更新されることが出来た。ダウテンダイの『鎮魂曲』が他のどんな書物にも増して尊かった時代もあれば、又、ビスマルクの演説や書簡を読んで自分に政治家となる素質があるなどと思う時代もあった。私は自分に素晴らしく気に入ったものでも、それを書いた人の名前を覚えておくということをよく忘れてしまうという悪い癖があった。だから私は、ある素晴らしく自由な言葉、青春の多彩にして力強い描写を感激して記憶の中に持ちまわっていたが、そういう素晴らしいものを書いた人がヘルマン・ヘッセという名前の詩人であることを思い出せないというようなことがあり得たわけである。

*

**

既に人生行路をかなり遠くまで辿ってくると、以前我々が偶然の道づれにすぎないと考えていた多くの人々が、ふと気がついてみると、その実は誠実な盟友だったことが判るようなことがある。その人の方でも、我々に対して同じようなことを言おうとしている場合は嬉しいものだ。ミュンヘンに暫く足をとどめた時、ヴォルフスケールの家で一人の若い男と知合いになった。初めのうちは、ただその顔つきのラテン的・高地的な美しさや、非常に奥床しい服装などが私の注意を惹いた。マクシミリアン・ブラントルだった。古い良家の出で、弁護士を開業したばかりで、その傍ら既に優雅な響きの美しい恋愛歌を載せた抒情詩小冊子を公けにしていた。私は彼によって一つの新しい人間の型を稀なほどに明瞭に知った。「私には人生の方が芸術よりも重要だ。」---- 私が彼から聴き知った最初の言葉の一つは、こういうさほど新しくもない告白だった。問う私はまだ一切のものを芸術に負っていたので、こういう言葉を聴くのは決して愉快でなかったというものの、やはり彼に同意しないわけには行かなかった。世間一般の人たちよりも、彼は結局この言葉の裏に遙かに深い考えを秘めていたのである。即ち彼は、人生それ自らに厳粛な芸術的形式を与え、自分自身を文化を以て充溢[じゅういつ]させようと考えていたのだ。私は彼をそういう風に理解し始めると、程なく私の事情が許すかぎりでは半ば無意識に彼の考えに添おうという気になった。彼は私たちよりもずっと落ち着きがあり、あらゆる意味で私などよりも深く世間を知っていた。ザルツブルクに出かけて行ったり、イザールの谷を散歩したりすることが、私たちのような者にとってまだかなりのことを意味していたような年配で、彼は既にアテネやグリгентやローマを知っていた。それは、林檎の皮を剥くといったような、さりげない仕草のうちにも現れていた。

フラウエンプラッツの両親の家で、ドームの塔と向い合せの階上の高い一室が彼の部屋になっていた。ミュンヘンに出かけて行くと、大抵私は彼の招きに応じてその現世的な美に飾られた僧坊に彼を訪[と]うことにしていた。まず一番初めに気がついたことは、午前中は法廷で犯罪人の弁護に当るこの人間が、夜になると自分の選りすぐった品物を相手に時を過すその敬虔な態度だった。小さな蔵書は、今までに私が見たことのある中でも最も貴重な新古の書巻から成っていた。書物の装幀などを愛玩する容子、書物を書架から取出して頁を繰ったりする時の叮嚀さ、ある書物の内容をまず特徴づける短い明瞭な言葉、それから紙質や、活字、組版、表装などの性質に関する豊富な知識、そういうものを見ていると、私自身が時折どんなに荒っぽく書物を取扱ってこれをいためてい

るかが思い出されて恥ずかしい後悔の気持を覚えるのであった。内容が気に入らなかつたり気に入ったりするのに応じて、私は荒っぽい賛同の言葉や疑問の言葉などを欄外に書き入れたり、あるいはそれどころか私が頭の中に描いたその著者に向けて悪口雑言を浴びせかけたりするような次第であったから、この上もなく貴重な革表装や羊皮装幀の書物などにも遠慮会釈がなかったわけである。それでも結婚してからはさすがにこの乱暴な風もやや納まった。さてところが、今こそこれほど敬虔に書物を取扱う人間を目撃したので、私にもやはり、これからさき貴重な装幀の書物をどれほどの注意深さを以て取扱わなければならないかということがはっきりと判ったのである。

彼の部屋の壁にかかっている三枚の大きな写真で、私は初めてアプロディテの祭壇を見識った。この芸術作品の素晴らしさは既に幾百万の人々の熟知するところだったのに相違ないが、ただ私だけはこれを知らなかったのである。とにかく色々なことを活発に語り合う若い二人の間にどうしてこの素晴らしい象徴に関しては長い間沈黙が守られてきたのか、今ではもうその理由が判らない。恐らく二人ともどちらか一方が口を切るのを待っていたのであろう。ブラントルは私の質問を、わたしはブラントルの説明を待っていたのだ。それで二人とも相手が切り出さないで、自分から口火を切ることが出来ずにいたのだ。ミュンヘンは年に二三度出かけて行く位のものだったが、しかし時たま出かけて行くたびに、この古代の浮彫り像の持つ異端と拒絶的な偉大さが次第に大きくなって行った。そして私は、エーテルの中に飛び交う鳥のように、この浮彫りの姿の中に住んでいた人間を驚嘆しないわけには行かなかった。初め私はいつも大きな虚無の中を見詰めているような気がした。そして、火に燃えぬ物体から焰が退いて行くように、私の眼差しはいつもこの素晴らしいものに打当たって退くのであった。後になって私はいくらか解釈を試みようとしたが、それは徒労に終わった。もしも古人が星座を我々に伝え遺しておいてくれなかったとしたならば、星座の組合わせを新しく考え出すということは私にとって絶対に不可能だったであろうが、これと同様に、私はあの当時、後によりかかった女が皿から取り出そうとしているもの、別の容れ物に入れようとしているものが何であるか、あるいは二股の笛を吹きたわむれる女が何を意味するのか、何故一方は衣をつけているのに他方が裸なのかなどということがどうしても判らなかったのである。どこともしれぬ暗い深みから光の中に立ち登り、その腰のまわりに一枚の布を垂らしている二人の美しくも優雅な女に半ばを支えられるようにしているしなやかな女神も亦私には永く依然として素晴らしい秘密であった。そして私はその解決を、日を経るにつれて益々辛抱強く遠く将来に期待した。我々はよくある事柄について、どうにも手のつけようがないということを使うのであるが、そうはいうもののそれでももうその事柄の躍動の唯中に立ち、いつか他日その事柄のために更に純粋な状態を得る時があるという予感を持つものなのである。

ブラントルは、手ずから茶を立てて私にすすめてくれた。そして私たちが呑む純支那製の茶碗を濯[そそ]ぐ時になるとどんな人間の手にもこの仕事を任せたがらぬという風であった。どこかドイツや、南方の町の話でもしながら、その貴重な茶碗をまるで聖盞[せいさん]のように洗い浄め、柔らかな布で拭っている彼の姿にまして嬉し気に見えるものはなかった。茶碗は彼の手の中で不滅のものになり、彼は年老いても依然としてこれを所有しつづけるであろうということが感ぜられるのも、そんな時であった。それに丁度その頃、私は無一物ということの持つ祝福に関して極端な考え方を始めていたので、選りぬきの所有物に対するブランドルの深い根柢のある喜びは一層不思議に私の心を揺り動かした。人間や事物は、我々がそちらの方へ手をさしのべぬ間は、その最も喜ぶべき面を示すということの幾分かは既に子供の時分にもう嗅ぎ出すものである。一寸した散歩の折ふし草花や虫などの蒐集に一生懸命になっている時、弱って行くものや、捉えられたために衰えて行く生きものは決して私に気持よい考えを起させなかった。それは丁度私の自由を奪うもののように思われた。とにかく後になってから先生の言附けで、そういうものの構造や組立てや特徴などしっかり覚える段取りになると、私が虐めたり殺してしまったりしたものの姿が再び元のように浮び上ってくるのだが、しかしそれは、認識によってよそよそしくなった何か別物だったのである。それから以後の生活にも幾度かこれに似たような経験をした。若かった頃は生命のあるなしに拘らず一体に

物に執着するようなことがなかった。私の家が殺風景すぎるのを気の毒がる女の患者たちが、大切にしてきた家伝来の品物を割愛して、机や戸棚などを、花瓶、燭台、飾箱、灰皿、陶器製の動物や寒暖計の嵌め込まれたガラスのオペリスクなどで一杯にしてくれた。親切な相手の気を悪くさせまいと思えば、そういう品物はそのままにしておくより他に仕方がなかった。けれども私はそういうもののどれ一つにも関係を結ぶことがなく、なるべく見ないようにすることに慣れた。女中がコップの花瓶だのを壊したりする時、私がいつも微笑するだけなので、女中は驚いていた。それをまた誰彼に言いふらすものだから、私は人間ばなれのした気のよい人間だという評判をとってしまった。心地よく美しい調和のとれた調度なども、他人のものなら大いに感嘆することも出来たが、自分の住居[すまい]に関するかぎりはどんな椅子にかけようと、どんな杯で呑もうと、どんな寝台で眠ろうと、私にはいつも大した変りはなかったのである。さてブラントルと交って初めて私は不意に事情が呑み込めた。それは即ち、人の手に創られた数ある品物の中から二つ三つの本当に美しいものだけを真に自分の持物とし、そうすることによってその他の世界からやってくる圧迫や誘惑に抗して自由な境地にしようとするのであって、彼こそは非常に高度の成年に達していたということである。小綺麗な品物の所有を断念するということは、修道院の人々や、本当に偉大で指導的な人間にのみ許されていることなのである。我々のような者がそういうことをすると、大抵は一種の高慢な野蛮行為に墮し易いものである。人間を幸福にする高貴な品物のまどいの中に感性を隠し潜ませておいたからこそブラントルは当時まだ家庭も持たないのに、自分が出会う他人の持っている良いところをすべてはつきりと視、これを認めることが出来たのである。そうして彼自身の詩的天分も、他人の詩に本当の愛情をもって献身するのを決して妨げなかった。彼がありふれた詩の中に潜む輝きを見つけ出すやり方は、いつも実際驚嘆に値した。短い詩章を四つほど彼のところに送ってやれば、大きな紙に四頁の感想を返事に貰い、それによって初めて自分の詩がどういうものだったかが判るといふようなことがあったわけである。実際彼は他人の書いたものの中に深く入って行けるので、いわばそれが彼自身のものになってしまうのだ。だからこそ、訂正を加えたい詩集の中の場所をきめたり、それどころか全然抹殺してしまったり、あるいはその詩を書いた本人が散々にけなししているものをまた取り入れたりする権利が当然生れてくるのであった。そんな時彼が私を遇するやり口は必ずしも穏かとは言えなかった中々以てたとえあの貴重な茶碗を扱うような具合に私を扱うことなどは、まずまずなかった。逆に私が彼の要求から余りにもかけはなれていたりすると、彼は遺憾なく裁判官のような峻烈さを発揮した。現代の詩人などには到底守れそうもないような大仰で響きの強い約束の言葉の二三を、私は九十年代の色々な書物から時々借用したことがあった。物を書いていて、明晰な感覚が疲れてくる時には、よくそういう言葉が頭に浮んできた。ブラントル氏は、そういった野放図な浮誇の言を徹底的にやっつけるのであった。何しろ彼は私よりも、私が到達し得るものが何であるかをよく心得ていたので、そのために一番私のためになった人間であった。

*

**

年に一度か二度位、ハインリヒ・ラウテンザックがベルリンやミュンヘンからやってきて、春や秋などをパッサウの両親の許に過すことがある。年下の彼は私に欠けているものをふんだんに具えていた。模索、逡巡、陰気な控え目などには縁のない人間だった。自分の才能に信頼を持って、喫茶店であろうと、散歩の途中であろうと、彼は絶え間なしに書きつづけ、気儘で才智に溢れ、間のびのした南バイエルンの方言で喋るかと思うと、悪く垢ぬけのしたベルリン言葉でまくし立てる。文壇の手練手管にも通ぜざるはなく、時を問わず詩の朗読もよろしい、夜っぴて飲み歩くのもよろしいという、最も愛すべき変り種のカリスマ肌であった。リヒアルト・シャイトが出していたきれいな詩の雑誌『アワルン』には、この若冠詩人の明暗に漂うような詩章のために特別号が発行され、彼はただヘルマン・エスヴァインとともにその一号を分てばよいことになっていた。それから又彼は自分の劇作家としての才能にも自信を持ち、ヴェデキントを偶像視していた。彼がヴェデキントを賞讃する様子は、はた目にも気持がよく感動的だった。ただヴェデキントのエロティックな場面が余りに弱すぎると言い、少なくともこの点だけでも

この巨匠を凌ぐということをも自分の主な使命としていた。すらりとした青年が絶えず身体を前にのめらせるような急ぎ足で、どこかパッサウの細い路地にでも姿を現すのを見ていると、私はいつも休暇の時のような愉しい気分が襲われた。その外貌には父親の国であるライン地方のプアルツの空気が漂っている。こわい黒髪を高く冑のように掻き上げ、北国の明灰色で鋭い両の眼を持った人なつこい純粋な血族の風貌は、悦んだり感動したりする瞬間にはたとえようもなく清らかになるのであった。個人的な生活については余り知らなかったが、その生活の中でも、継母に対する彼の関係はいつもこの上なく美しいもののように思われた。今でもパッサウで呉服屋をやっている質朴で物静かな婦人である。息子が大胆な作品を朗読すると、この婦人はまるで教会の中にでも座っているように敬虔に耳を傾けてこれを聴く。息子に対するその信頼は抜きがたいものであった。おして、実の母親のような思いやりで、まだ収入の少かった息子の暮しを一所懸命に援助してやった。兄妹も亦やはりハインリヒに忠実だったが、父親だけは工業大学をやめてしまったというので腹を立てていた。丁度、溺れかかっている魚を救おうとする者のように老人は性懲りもなく、自分の息子を文壇の世界からすくい上げようと試みたのだが、息子にとってはそこがこの上もなく住み心地のよい世界だったのである。ラウテンザックは、何時なんどきでも朗読することを拒んだことがなかったので、私はよく愉しい想いをしたが、特にその『古いなつかしいバイエルン絵巻』の中の詩をいくつか出来るだけ上手に読んでくれた時などは全く素晴らしかった。それらの詩には我々の同郷人の特色がたとえようもないほどの自然さで描き出されていた。これとは反対に、彼の書く戯曲はどうも私には難物で、一くぎりしてから私が彼に堤する質問は、彼にとっては途方もなく単純なものに思われたに相違ない。一度などは私があんまり訳が分からなすぎるといって怒り出したこともあった。私の作品を見せることは殆ど例外的だった。きっと私の詩が余りにも単純すぎるとか、あるいは余り古めかしいなどと言われはすまいか、そう言われたら完全な抹殺も同じことだという懼れがあったので、どうしても見せる気になれなかったのである。ある時はもう少しのところでいっそ見せようかと思つたこともあった。『ドクター・ビュルガーの日記』が丁度完成した夕方、彼が私を訪ねてきたので、一つこれで驚かしてやろうと決心したのである。ところが彼は『牧師館喜劇』の原稿を持ってきて、すぐさまそれを朗読し始めた。このしたたかな茶番劇は私にも判らないことはなかった。そのお蔭で私たち二人は愉快な一晚を過すことが出来たのであるが、そういう作品のあとから、ヴェルター的に苦悩する医師の手記を読み上げることはあまり似つかわしくも思われなかった。この作品は、それからのちも猶、数年間机の抽斗に蔵[しま]われたままになっていた。残念なことにラウテンザックのパッサウ滞在は、その後次第に稀になり短くなり、それに当時の文壇の他の代表者たちも、最早一人として私の視野に親しく現れてくることなくなくなってしまった。しかしその代りには、運命の手は私を偉大な芸術家のところに導いて行った。その人間とはそれ以来ずっと交渉を保っており、それから後も色々とお陰を蒙ったのである。

*

**

パッサウの近くに住んでいたアルフレート・クビンが、カール・ヴォフスケールのすすめに従って、一日私を彼のところに招待してくれた。ところがいきなり彼の家を訪れるのではなくて、我々はまず人の立てこんだ喫茶店ヴィッテルスバッハで落合つたのである。呑気そうにカルタをやっている市民たちの間で、クビンの風貌は何か異様に際立っていた。彼の顔は時が来ない間に賢くなってしまった子供、その顔だちに極度の神経的な緊張が深い疲労と交代する冥界の僧侶の顔に似ていた。それは太陽の国に生まれた人間の顔ではなく、月の世界に生を享けた者の顔であった。こういう顔やこういう頭を作り出すためには、野蛮な世界と文明の世界の、東方と西方の、色々の種族が協働したのに相違ない。それから二三日して私はイン河の向うにある丘の上のゲーテ・ツヴィックレートに彼を訪れた。あの年若い巨匠が非常な忍耐をもってその幻想の世界に私を導き入れてくれた 1910 年の春の一日を、私はその後いくたびか感謝をもって思い返すのであった。

絵画[かいが]陳列上の唯中にクビンの筆になる強烈な作品の一つを見出す者は、花で飾られた美しいヨットの真中に突如として一隻の戦闘艦が姿を現すとといったような気分を覚えるに相違ない。彼が自分の絵を一枚私の手に渡してくれた時、私は何かこれに似たような気持になった。丁度あの頃、彼は烈しい変転と過渡の唯中であつた。ザンザラの幻想が出来上りつつあつたのも丁度あの頃なのであろう。彼独自の方法で現実を把握する完成期のクビンが、漸くあの頃現れ始めていたのである。私が見ることの出来た作品は、依然として殊にハンス・フォン・ヴェーバー画帖と『他の面』との描法を示していた。これらの作品の多くには、クビンの人間性の月世界的なものが動きはたらいっていた。私には無縁ではあるもののやはり真実だと思えた一箇の世界が私を把えた。それは、時間と空間とがなごやかに交錯し、碧空や繁った樹木のある、日頃慣れ親しんだ空気の温和な地上の日々の世界ではなく、生物たちが和解的な大気によって互に結ばれ合うこともなく、却って太陽は眩[まばゆ]く白々と黯い天空に懸かり、光と永遠の暗黒との境目には灰色の中間地帯が不断に現れては消え行く世界、それは、没落と難船と拷問と、汚辱と衰亡とに溢れた底知れぬ世界、希望なく一切が危険に曝されている世界なのである。私は何等の用意もなく突如としてこの悪[あ]しき母たちの領国の唯中に自分の身を見出した。それまでクビンの絵は一枚も見ることがなく、クビンと同じような途を行った人々を一人も知らなかった。私は、ゴヤとか、ムンク、ブリューゲル、オディオン・ルドン、エンゾールなどという名前も殆ど知らなかったのである。

現代の新しい装飾画[グラフィック]は、まだ全く私の体験となつてはいなかつた。ただランツフートの乱暴な学校友だちだつたヴィリ・ガイガーの素晴らしく強烈な木炭のデッサンを少しばかり識っているだけだつた。それにマクス・クリンガーの最も有名な絵を二三枚見ていたのである。私は時間の余裕を持たなかつた。仕事と享受の間を忙しく動きまわり、いわゆる現実というものに憧れ、しかも一方では絶えず私を現実の上に高めてくれるような力を追い求め、中でも新しい詩人の声に耳を澄ましていた。だがこれと同時に、私はやはり結核医であつたし、患者は益々のつびきならぬように私の生活全体を要求してやまなかつた。それで同然のことながら私の根本的な生活感情は、たとえばクビンの持つものとは異なつたものであり、私の精神の力もクビンなどとは違つた場所に置かれていたわけである。既に久しく、私の日々の仕事は、「恐怖を愛に変ずる」ことを私に迫っていた。---- だから一体どうして、酷烈に眼を覚ましつづけて、永遠に我れとわが身の不安におびえる魂の魔力的な幻想が、ただちに私と結びつき得たであろうか。私はクビンその人の指導を受けて、どうやら次第次第にものを視、受け入れることを学んだのである。すると、私が日頃自分の生活を死の間近に営んできたのが、決して無駄ではなかつたということが、次第に明瞭に現れてきた。無常の女神は、毎日私の身体にその神聖な毒素を注射したのだ。そうして、一種の免疫性が出来上り、他人には慰めのない残酷さ以外の何物をも意味しないような多くの絵も、何等私に効果を及ぼすことなく通り過ぎて行ってしまうか、あるいは、最初の奇異の念が克服されてしまったのちには、まさにそれとは正反対の気分、即ち現実の人生に向けられ、犠牲心に富み、喜悅に溢れた気分を呼び覚ますのであつた。

眼が比較的長い間、白地の上の黒い影絵[シルエット]を見詰めていると、あとで瞼を閉じても黒地の上にその影絵が白く光る姿として見られるものであるが、わたしがクビンのところを訪れた帰り途、一人で冬の夕べを遙々とツヴィックレートからパッサウに辿って行く時には、よくこの視角現象に似た気持を覚えるのであつた。あの画家の暗澹たるなじみ難い幻想の数々は、私自身の天性の声を沈黙させはしなかつた。私は、快癒ということに想いを凝らすのに慣れていたので、私なりに解放、遍照、忍耐の思想を以てその幻想に答えるのであつた。暗澹たる形象の及ぼすあのような効果は、ただ背後に創造的な力を隠していればこそ可能だつたのだ。そういう形象の中に現れ出でようとする魂は、傷つき曇らされていたには違いないが、しかし逡巡する魂ではなかつた。その魂は、そういう不気味な姿を真正面から見詰めるだけの勇氣を持っていたのだ。それどころか、虚空の寂寥の地域をさまようことのうちに生れてきた勝利と歓喜とがそこには感ぜられたのだ。しかも、不安の夢の数々を紙の上に描き出す手は、決して不安な手ではなく、まさに無常の象徴を写し描く時にこそその移ろわざるものに到達するところの、

着実にいて狂いのない手なのである。他の人々が明るい昼間の世界を愉しむために、幾つかの精霊が態々薄明と暗黒の中に支配するように宿命づけられているのだという予感が目覚めてきたのもあの当時だった。しかし、芸術家というものはどれほど深く不気味で幻想的な世界の中に没し去っていても、いつかはただ自分の夜の夢を捉えるだけでは不満に思うような日が必ず訪れてくるであろう。より高い段階の存在、幻想のための力が明るい昼の覚醒のために貯えられねばならぬより純粋な態度の存在が、晩[おそ]かれ早かれ彼には明かになってくるのに相違ない。芸術家は、一旦そういう境地に到達すると、恐らくそれまでよりも安らかに眠ることが出来るようになるだろう。しかしその代りには、日常生活の何気ない現象が幻想的に彼に向かって押し寄せてくるであろう。精神的成長は、こういう新しい平衡の中へと造形家クビンをも次第に導き入れて行った。まさに彼の青春を打ち破ろうとしていたいくつかの緊張は、段々ととけほぐれて行って、彼も怖ろしい象徴の中間国を遁れ、次第に簡素な手法によって世の中を自己のものにしようとする。聖書やドイツの伝説に取材した作品に相並んで、昔の巨匠の佛を伝えるような作品が生れてきたのである。そういう絵には、たとえばただ一本の樹とか、淋しい田舎家とか、沼地の風景とか、塔、水車、馬などが描き出されているにすぎなかったが、しかしそういう絵のどの一枚にもクビンの全面目は躍如としており、二頭の瀕死の馬を曳いて谷間を歩いて行く敗惨の兵士を一人描いても、そこに我々は全軍の壊滅を感じ得しうるほどなのである。

さまざまに変様を閲[けみ]したクビンのうちには、ただ一つ変ることのないものがあった。それは、二週間も絵筆を手にしなないことがあると殆ど絶望してしまうような、絶えず試み学び生産する人間の持つ制作熱であった。このような不撓の勤勉さの目撃者たり得たことこそ、私のパッサウ時代の最も重大な体験の一つに属する。敢てクビンならずとも、いわゆる憑かれたような人間、中にはそれでいて非常に優れた才能を持った人間になら既に度々出遭っていたが、そういう人間は大抵の場合世事に疎くて、彼等の秘かな財宝を瞬く間に消費してしまうのであった。日々刻々辛苦して自分の魔神[デーモン]に堪えて行くばかりか、自己の外的内的生活を魔神の手から戦い取ろうと敢てするような芸術家の仕事を覗き見た時、不安に手さぐりし、計画の実行を今日から明日へと一日のばしにのばして平気な私は、まさに痛棒を喫したというわけである。----「精神が一箇の目標に向けられると、程なく色々のものが向うから精神に歩み寄って、遙かな思想や事物は自分々々のつながりを脱して精神に向って急いでくる。」この言葉を実証したのが他ならぬクビンであった。彼は自己の使命をはっきりと悟った。その日から使命の達成に必要な生活形式をも見出した。即ち彼は、苦勞も妨げもないようにまわりに防壁を築いてくれる女性を発見したのだ。彼は自らのためになる生活の方式を獲得した。そのうちに沢山の友人が彼の周囲に集まってきて、彼の行路を励ました。そして彼も亦、すべて深く仕事に没頭している人間がそうであるように、いつでも友人たちのために時間を惜しむというようなことがなかった。

私は、あの頃私自身が身をおいていた状態を、この有名な友人の状態と比較してみようということに思いつかなかった。私が、なぜ自分の方が余程運命の祝福を受けることの少ない人間だと考えようとしなかったかは、今だに実際不思議である。これが、それなくしては苛烈な人生の試練に堪えることの出来ぬあの有難い錯覚の一つにすぎなかったのかどうか、それは誰にも判るまい。けれどもある時、クビンが、私を虜にしている患者の群を実際に見て、ほほ笑みながら、「この大騒ぎを我慢する位なら自殺してしまった方がましだね」と洩らした時、勿論私は彼の言うところを安全に理解したが、それでいてやはり胸のうちには一つの異議が起った。そして、恐らくその時初めて、あの大勢の患者たちこそ色々の破壊的なものを私から遠ざけてくれるのだということ認めぬわけには行かなかった。何人に向っても開け放しになっている私の生活は、普通の人間の生活よりも遙かに危険の多いものなのだ。それは明かだった。しかし、その代り私の生活は又強い守護する霊に守られ、そしてクビンには用のないような反対の力を養い育てて行ったのである。それにしても、もし私が眼に見えぬものの中に助言を求め見出ししていなかったとしたら、恐らく私は普通の人よりも早く疲労してしまうことを避け得なかったであろう。過去の諸世紀から強力な精神が私に語りかけてきて、元気づけて

くれた。不気味なものは決して究極の解決ではあり得ない。真の泉、快癒の泉は、恐怖の生ずる地層よりももっと深いところに湧き出るといふ、私が生れ持った信念は、クビンの作品からも、屢々彼自身の意図に反するが如くに輝き出ていたが、一切のものはこの私の信念を益々強くしてくれた。暗黒の途は常にほどなく歩み尽されるが、光の神秘は究めがたいものであることが判る。

このささやかな追憶の書は、過去の救済者や予言者、歌い手などについて語ろうとするものではないが、しかし同時に、私がただ遠くの方からついて行った現代の代弁者たちについて言及しようとするものでもない。ここに記された私の感謝する追想は、実地により、参与により、剗切[がいせつ]な暗示によって、私の不安定なところを助けてくれた最も身近な伴侶の人々にのみ捧げられるのである。一度でもカール・ヴォルフスケールと時をともに過したことのある者ならば、高雅な不安を覚えさせられて、彼と別れた後、こう白状するに相違ないのだ、即ち彼によって全く新しい識別の仕方を学んだこと、丁度天文学者が螺旋状[らじょう]星雲や光年を物語る時に、われわれが宇宙の深部に対して覚えるような憧憬を、我々のドイツの言葉の深淵に対して覚えしめられたということなどを。私は奇妙な状態で彼と初めて出会った。それは、町から遠く離れたバイエルンの森の中を散策している時のことであった。その時のことは、相当大がかりに計画している別の本の中で他のことと一緒に書こうと思うから、今ここには前以て言うまい。しかし、ロジェル・ドウ・カンパニョーレ---- 私の少年の日々以来、忠実な友として助言者として、忠告者、審判者として、変ることなく尽くしてくれたこの孤高不羈の詩人にして思索家は、多くの風景が緊密に編み込まれている時にのみ本当に姿を現し得るような人間である。

暫くの間、懸命になって私の運勢をト[ぼく]してくれた人に、あの深く、暗く燃えるような詩人レオ・グライナーがある。パウル・エルンストやヴィルヘルム・フォン・シヨルツの作品を知ったのも彼のお蔭であった。しかし、これらの詩人の影響を本当に自分のものとして用いるようになるまでには、その後猶数年の月日が経った。なぜなら、当時私が驚嘆しつつそのまわりをめぐる星は即ちリヒャルト・デーメルだった。永遠に明晰さを求めて戦うこの撃迫的な精神が、求めてやまぬ青年にとって何を意味したか、我々は彼によって如何に指導されつつ誘惑されたか、彼が我々に対して多くのものを如何に余りにも困難にまた余りにも容易にしたか、彼の魔力権を脱するには如何なる力に救いを求めなければならなかったか、そういうことすべてを細々と示すのは、未来の人々にとっても教えるところが多いであろう。開業していた頃はまだ幾度もデーメルの許に帰って行った。実際デーメルが、まるで魔法の球で九本のケーゲルをいちどきに倒してしまうといったような感じのする箴言[しんげん]詩、考えの深い男性的な短い箴言詩は、到るところで私を導いてくれた。さてある日、新聞を見るとデーメルがミュンヘンのバアイエルン・ホーフの鏡の間で講演をするということなので、その晩は私も出かけて行って、出来ることなら詩人と近づきになりたい、しかしとにかく私の書いた詩を二つ三つ先きに送っておこうと思立った。そのためにどんな手紙を書いたかは今もう覚えていない。返事は期待しなかつたし、こちらの住所氏名も書かず、ただ署名だけして全部をホテル宛てに送り、自身直接ミュンヘンに赴いた。だが講演が終ってその有名な詩人が無数の人々に取りかこまれているのを見た時、話しかけることは断念し、翌日はまた冬のPASSAUに引返した。そこには途方もなく沢山の仕事が私を待っていたのである。しかしそれから一週間経つと、デーメルの明晰この上もない心からの喜びに溢れた呼びかけが私を驚かした。この挨拶が単に体裁だけの身振りでなかったことは、その新年の始めになってはっきり判ることとなったのである。ある時、真夜中頃家に帰ってきて、もう蠟燭一本つける気にもなれないほどぐったりと疲れていると、配達された郵便物のうちに、商人でも使いそうなごくありふれた灰緑色の封筒に入った一通の手紙を発見した。住所はタイプライターで打ってあり、差出人の名前はこうなっていた。ホフマンスタール、ヴィーン、ロダウにて。リンツやヴィーンあたりの家族づれが、休日を利用してPASSAUの附近に二三日過すようなことがあり、結核医である私がそういう人たちに呼ばれることも、丁度あの当時としては左程珍しいことではなかったし、それにやはり同じ頃に、アーダルベルト・シュティフターの姪にあたる若々しい顔をし

た、白髪、衰弱したきれいな老婦人が、私の治療を受けたこともあったので、これはきっとホフマンスタールの親戚にでも当る病人が私の治療を受けにきたのだろう位に思った。しかし医者としての私にではなく、無名詩人としての私に書かれた文面を読んで、流石に私も少し驚いた。ある新しい雑誌に詩を寄稿して貰えまいかというのである。机の上には一冊の書物が午後からずっと開き放しになっていた。そこには、まだロリスという名になっている彼の詩『体験』と『使命』とが印刷されてある。そこで私は、この古風な住居の中にあつたありとあらゆるランプ、豆ランプ、蝋燭に火をともし、寝に就く前にもう一度、これらの偉大な魔力的な詩章を読み返した。その数年来、ホフマンスタールが私に与えてくれた幸福の数々は、彼のために考えられたあらゆる感謝の言葉とともに再び力強く甦[よみがえ]ってきた。ホフマンスタールにこの手紙を書かせたのがデーメルだったことは判っていたが、しかし私は、眼に見えぬところに働きつづけていた精神の迫動作に答えが与えられたかのように、この手紙を私の挨拶に対する応答のように考えたのである。通信も三度四度と重なるにつれて、タイプライターはもう肉筆に換えられた。そして、これらの手紙を綴る文字の、曖昧のような投げやりな、それでいて明確な、到底他人の筆跡とは決して間違えられることのない行間には、次第に誰がこれらの手紙を認[したた]めているかが現れ出てきた。ホフマンスタールの手紙は、欠き難い清新な元素として私の生活雰囲気の中にまざり合った。色、青、あるいは灰色だったりするあの手紙の一つが配達されてくると、どんなに憂鬱で辛い日も祝日のようになるのであつた。そしてこの交際は遂に個人的な邂逅に導かれることがなかつたのであるが、そうかといって一時的なものでもなかつた。純粹に精神的な関係が破れてしまうかもしれないという危惧の念によって、追求し意欲し変化を希求する私と、同様にまた所有し、完成せる秩序のうちにやすらう彼とは、実際のところ余り近寄りすぎることを屢々差し控えていたのである。とにかく私としては、離れていようと近くにしようと、私の行動を注視する偉大なる言語の天才を、いつも目立たぬうちに、ある時は私に自信を持たせ、ある時は謙譲を教えて、彼その人の考えに従うならばどうということが私に大切であるかを、優しくも、また着実に教えてくれた聖化せる詩人を、この世界に一人識っているということだけで充分であつた。彼の小言は、具体的ではあつたが、決して小喧[やかま]しくはなかつた。けれども賞讃は、どうしてもそれを受けずにはいられないようなものであつた。ホフマンスタール以外の、有名な詩人というものは、大抵新進詩人の詩のうち何はともあれ自分自身の佛を探し求め、これが見つかると悦ぶものであるが、自分の痕跡が見当たらないと失望してしまう。それはそれで正しいのだ。ところがホフマンスタールは、自己自身から目をそむけてものを見ることが出来、その作品が根をおろしている地盤を探し求め、そしてこの地盤から逆に作品を吟味するという風であつた。

これほど多くの精神的な自由を示し得るのは、ひとり現代を過大に評価することなく、過去のあらゆる真の芸術作品に通暁している人間あるのみである。ホフマンスタールがインゼル版の『ドイツ散文選』に附した比例なく美しい数頁を読んでみれば、私の言うところは何人にも理解されるであろう。彼は自己の属する世紀を超えて遙か遠方を観ていたのだ。それだからこそ、同時代の人々にあれほど多くのものを言うことが出来たのである。彼が詩や散文のうちに見出した解釈が自分の言いたいところを言いあてているのを感じて、意外な賛同を与える時、我々はたとえようもなく励まされるのである。彼が他人の言葉を捉えこれを解釈する能力はまことに驚くべきものであつた。正しい星辰の時を受けて行われる現世の出会いの再び得難いこと、又ある一時代の、本当に精神的な活力は、他の活力がその効力を失うことなくしては、どれ一つとして強制的に遠ざけられるものではないという暗々に予感された法則について語った彼の講演は、印刷され小さな書物になって出ていた。その文章を手にして半日と経たぬうちに、ホフマンスタールから手紙がきて、その中には情熱的な激励の言葉が記されてあつた。その時彼はこう書いていた。時代を俱にすることの秘密は、人生においても仕事においても自分を働かしてやむことがない。それがまた同時に人間的存在であるかぎりにおいては、自分はそこに精神的存在への鍵を見出している、と。

「人の声の届かぬ場所に決して生活しない」というこの素晴らしい生活様式、自分自身を必ずしも常に真剣に考えていない未知の人を、忠実に真面目に考えてやるというこ

と、幾多人生の危難に出遭ったにも拘らず、私はいつもそういう態度によって少なからぬ着実さを与えられたのである。これと相並んで、彼は常に、或る人が実際のところはどういう世間的な状態にあるのかということを実に歴々と見抜いていた。そして、考えられるかぎり最も献身的に援助してくれるのであった。我々が彼の援助に気づくのは、大抵ずっと後になってからのことであり、しかも絶対に彼自身によって悟られることがないのだ。彼は親切にもインゼル書肆の社長アントン・オッペンベルクに、私の詩の刊行を奨めてくれた。こうして、私の生涯に与えられていた最も美しい最も及ぶところの大きい幸運の一つを私のところにふり向けてくれたのであった。

*

**

苦勞の多い年月の内的不安が、私に数々の軽率な振舞いをさせた。一寸した旅の途すがら、「古都ニュルンベルク」が大変気に入ってしまったので、これから先も度々此の地を訪れようというような生やさしいことでは我慢がならず、出し抜けにすぐ二つ三つ部屋を借りて、妻や子供とここに引き移ってしまった。私たちの小さな住居は、ルートポルトハインの近くで、患者が私を待つのではなく、こちらで患者を待たなければならぬのに驚いた。時が経つにつれて、どうやら少しばかりの患者はあったが、この大きな町ではもとより誰も私を知ろう筈がなかった。私の定住を祝福し、私自身なぞよりもずっと私の身の上を心配してくれるおためごかしの、老若幾人かの保険会社の代理人たちが、それだけに煩[うるさ]く門を叩く。とにかく私は気軽に成行きに任せたのだが、彼等にしてみれば、私が早死にしはすまいとか、私たちのささやかな家財が烏有[うゆう]に帰しはすまいかなぞと気を揉むらしく、といて彼等にそうした災難を避けるてだてのあろう筈もないので、そんなことから起る数々の結果を、少なくとも予め緩和しようというのである。こういう御親切も度を過ぎしては次第に煩わしくなった。そこである冬の日曜日、家政婦が又々一人の世話焼きの来訪を告げるので、会って話そうという意を決しかねていた。待合室に入って見ると、少しもそういう気配のない若い男が、その昔祖父母たちの懐かしい部屋を飾っていた長椅子の色褪せた長い褥[しとね]に、シルクハットを両手に持ち新しい黒マントを羽織って腰をかけている。氷に覆われた窓ガラスから洩れる弱い光の中に、その容貌は厳肅に蒼白く見えたが、蒼白いといっても患者だとも思われぬし、それに大変打融けた信頼のおけそうな人なので、尻込みする気持を全く忘れて鄭重に挨拶した。彼はマクス・ディーツェルと名乗り、私の生活だとか家具だとかに保険をかけようなどというつもりは毛頭無いらしく、自分は父と同じようにホップ商でその事務所に働いているが、新しい芸術や新文学に全く心酔しており、つい最近あなたと同じ著者名で出た詩集を一卷読んだ、と柔かな落ち着いた声で話すのであった。---- あなたがその御著者なら、ニュルンベルクの住民として何なりとお役に立ちたい、この町では好都合な関係もあるし、如何ように御利用下さってもよい、というのである。これだけのことを極めて率直に言い終ったが、ただ時々褐色の子供っぽい眼にいたづら気のある輝きを見せて、今週中に結婚して新妻とフランダースに旅行するが、すぐに帰ってくるから、そうしたら家へ御招待して、珍しい物を二三お見せしたいと、その意を同様全く飾り気なく告げた。「詩のためにあなたのような御方とこんなに気持のよい御知合いになれるならば、詩を書くことも満更ではありませんね」とあの日私は言ったが、此の短い来訪の結果が私のニュルンベルクの冒険に償いを与えてくれた唯一の物だったとは神ならぬ身の知る由もなかったのである。

ディーツェルの広い家で、私の記憶に残っている唯一の部屋は、すべてが黄色に調子づけられた部屋で、そこでお茶を飲んだり、美術品を鑑賞したりした。元々それは小さな広間で、居心地よく派手に飾られていた。壁に沿って長い大きな硝子戸棚があり、そこには蒐集した花瓶が納[しま]われている。又、ディーツェルがこれらの花瓶を愛することは非常なもので、時には全然別のことを話している最中でも突然立上がり、戸棚の一つを開けて、美しい瓶や偶然ひどく見事に釉薬のかかった壺を出してみるようなことがあった。真珠やシャボン玉や、甲虫の羽根に見るような色や又濃い琥珀のような褐色で、その上に氷の結晶の輝いているようなものもあった。最も珍重がられていたのは、

一見何の変哲もない鈍いかすれた赤褐色の容器で、口の方に行くに従って処々濁ったり輝いたりする黒色になっている。本来表面は全部この黒に染められていたらしい。これらは埃及[エジプト]の墳墓から出たもので、既に数千年を閲しているものだった。僅かばかりの蒐集品をもっともっと宗教的に取扱っていて、殆ど人に見せたこともないブランドのと同じように、ディーツェルのところでも、偶然の手に委ねられているものは何一つなかった。どんな小物も、仕方なしにまあ懸けておくといったようなものは一つもなく、壁に懸かっている二三の絵も、集まって一体をなすといった式の簡素な北国風景である。二つの飾り棚の間には、かなり大きな基台の上に、どちらかといえば柄のそう大きくない木像が据えてある。けれどこの木像は、何か荒々しい、怒りに燃えた脅威的なものを持っていた。スタイルといい、表現の迫力といい、素晴らしい逸品で、エルンスト・バルラッハの手に成った『北方の戦士[ベルゼルガー]』の像である。私は、あのクビンの、たとえば『戦い』などのような若干の絵によって、どうやらこうしたものが判りかけていた。この木像を観ているのは、丁度人形芝居を見物しているようなもので、初めのうちは、実際のところとるに足らない人形なのだが、観なれて行くに従って、本当に手足を働かしているように大きくなっていく。この木像の巨大さを識るには、やはり暫く眺めていなければならなかった。身体を半ば振って後にぐっと反らせ、恐ろしい打撃の身構えをしている。まるですぐにでもこの美しい広間の家具や、こまごました珍品、この像をこんなに誇っている家の人々などを、粉微塵に叩き潰してしまいそうに思える。今日、この木像のどこに惹きつけられたかを考えてみると、それは確かにあの偉大な憤激の容子ではなくて、むしろそれと、猛々しい容貌の背後に潜んだ天性の美しさ・敬虔さとの矛盾である。広やかな僧侶のような衣服もこの感じを強めていた。それ故、人の心を打つものは、ある眼に見えぬもの、即ち、このような静かな人間をこのように激しい動物的な狂気に駆りやってしまった非人間的な敵意を持つ力であった。

ディーツェルは、何物にも増してこの『北方の戦士』を誇り愛していて、私の最初の訪問の終り頃やっとこの塑像を見せてくれたほどである。彼はバルラッハを当代に並ぶものがない最も偉大な塑像家と考えていた。けれど、文学者では誰が一番高く買っているかということ、書架を開いてそこに並んでいる書物を示して教えてくれた。それはトーマス・マンのものだった。マンの作品の中でも、彼の所蔵しているのは最も版も早く装幀も美しいものであって、この時私は彼の日常座右においていた一冊の『トリスタン』を、この日の来訪の記念に贈られたが、それが意味した彼のこの作家への敬服の度が、どのように深かったかは、後になってやっと理解されたのである。

『北方の戦士』の像の丁度真向いにある、凭掛[もたれかけ]の非常に高い椅子にすわり、私はこの粗い金灰色の裏表紙の小説集の頁を繰って、ディーツェル夫妻が他の客と窓ぎわの卓子に話し興じている間、『神の剣』という標題の小篇を読み始めた。既に最初の数頁があるものを感じさせた。それは、必要ではあるが私には無い要素、私が常に立戻ろうとする自分の南ドイツ的様式に対する清新な北方的修正である。この卓抜なる散文家の冷静さ、繊細さ、鋭さ、何物も不用意に受取らぬ覆うべからざる眼光、冷酷なまでに厳密な描写が最も日常的なものに与える光と陰影、急所を外さないこの一撃一撃、それにあの世馴れた落ち着きのある大胆な調子---- 私はこれらすべてを、時としてあまりに曖昧な自分の感覚界や、少年時代からつき纏う強い明晰性への恐れなどに対する解毒剤のように感じた。私の母は、五歳の時にもう書くことを教えてくれて、石筆を余りとがらせたり、又それを石版に余り固くすりつけてはいけないと特に注意した。この素晴らしい小説を読みながら、再びそれが思い出され、私の表現が持っている内気なところは、考えようによっては、あの少年の日の書き方からきているのではあるまいかと、心に問うてみるのであった。トーマス・マンのうちには、模倣したくなるようなあるデーモン的に切迫するものが働いている。これほどまでの描出の眩き正確さ、人が好んで隠したがるところに照明を当てるこれほどまでに容赦なき意志はかつて識らなかったような気がした。打ち興じている人たちの方に眼を向けるや否や、一人一人を出来る限り滑稽になってくるような距離において考えてみたい気持が抑え難く起ってきた。全篇を読み終えて、この芸術家が嘔飯を禁じ得ないようにブリューテンツヴァイク氏を描いたのも、ある高い意図の下になされたのを識った時は、それだけに心を解き放たれるような

感があった。嵐を孕んだ雲の峰がミュンヘンの空を覆い、暗いサボナロラの血族・ヒエロニムスが、鼻で息をする美術商に投げつける警告、威嚇、恐怖すべき告示の怒濤は、蓋しそれだけ真実に凄然と鳴り渡るからである。今日このような呪詛を口にすれば、それは立派な予言のように聞えるだろうしかも、我々が戦慄するのは、それが既に 1903 年に書かれたのを知る時である。

書物を閉じて『北方の戦士』の面を視たこの北方の戦士と、猛り狂うヒエロニムスとの間に、諸々の思念が入り乱れて、凶事の予感が空中に揺曳していた。身体に明かに熱を覚えながら友人たちの許に立ち戻り、やがて別れを告げてそこを辞した。帰途心に浮ぶのは、まだ草稿のままになっているドクター・ビュルガーの手記であった。もっと夙[はや]くトーマス・マンの作品を識っていたら、ドクター・ビュルガーの手記は今より違って書かれたかも知れぬと自分に言ってみた。色褪せて落着かず、徹底しない私の描く情景や人物が、心苦しく眼前に浮んで来る。全体を改造して、多くの人物の特徴をもっと明確に適切に諧謔味を加えて書いてみようと思いついた。しかし、そう思っただけにすぎ、巨匠の芸術手段は中々容易に真似られるものではないということを悟らざるを得なかった。他人の秀抜なる業績の与える一番最初の印象は、非常に美味ではあるが、しかし熱いスープから立ち上る香気の如きものだ。すぐにも沢山食べたい。だが本当に美味しく食べるには、それが冷えるまで暫く待たなくてはならないのである。トーマス・マンや、その他の新しい作家たちから実際に教えられ、又何よりも私自身のフォームに対する勇気を強くし得る迄には、かなりの時が経過した。人を厳粛に憂鬱に不満にし怒らせるのは、驚くほど容易に成功する。しかし、精神的な手段に訴えて人間を心から明るい笑いに誘うのは、確かに功少なからざる得ない天賦に俟たなければならない。色々の欠点があったが、『ドクター・ビュルガー』もそのままにしておいた。『ドクター・ビュルガー』を尖りすぎた鉛筆でいじり廻す試みは、どれも私を辿りようもない道へ導き、ものから疎遠になってしまうことなくどんなものにも余り近々と歩み寄れないということを教えるに過ぎなかった。「余り近よりすぎる」と、「余り遠くから眺めること」、この二つのことは私にとっていつも同じ結果に終わったのである。

古いデューラーの街は、週一週と益々親しく我々に笑いかける。患者の数も段々増してきたが、そうかといってそれに疲れてしまうというほどでもなく、詩も時々生れるし、それにもうシェーネ・ブルンネンやゼバルドゥス教会の灰色や緑の塔も、パッサウのドームと同じように懐かしいものになってきた。けれどディーツェル夫妻は、私たちの生活を愉快にするのを明かにその結婚第一年の義務の一つと考えていた。私たちも日曜の午後は大抵彼の許で過した。ディーツェルはベートホーフエンを巧みに弾きこなし、又親しくしている女の声楽家を招いて、古い独逸や伊太利の歌を聞いて楽しんだ。そんな時、小さな息子は白熊の毛皮の上でディーツェルから贈られた絵本を見ていたり、時によると我々と一緒に恐ろしい『北方の戦士』の後で隠れん坊をしようとした。こんな風に生活していたのにある朝、寢床から起きしな、又以前の生活に戻ろうかという考えが、ふと起ったが、それがどうしてであったかは私自身にも今だにはっきりしていない。ことによると、自分が何者かになると思うならば余り仕合わせに暮してはいけないという、わけもなく信じている昔の考えが手伝ったのかも知れない。それに身体の調子もおかしかった。ディーツェルの家を初めて訪れた時に感じた不快な熱があって以来というもの、殆ど毎日夕方になると微熱が出る。それも時にはそう不愉快ではなかったが、間もなく呼吸困難や喀血や刺すような痛みが始まった。長年患者の床に接して受けた病菌が、遂に自分の肺を侵蝕してしまったのではないかという疑いをどうしても逐い払うわけには行かなかった。それで私だけゼーシュテッテンに転地し、そこから親しい友人のロジェル・ドウ・カンパニョーレに宛て短い便りをした。彼は何はともあれデーメルに手紙を書いた。驚いたことには、詩人がすぐ私に返事をくれて、あの精力的な愛すべき筆致で私がニュルンベルクに帰ることを止めるようにいつてよこした。この手紙にすっかり喜んでしまって、その後も度々訪れることになったこの野と岩山の岸边にとどまり、ニュルンベルクの住居を引払うことは、妻とよく助けになってくれる姪にまかせてしまった。夏がきて、健康も再び立ち直り、『太陽への頌歌』が生れたのもその頃のある午後のことであった。又、書肆インゼルが『ドクター・ビュルガー』を

出版してくれた。しかしあの頃の一番素晴らしかったものといえば、マクス・ディーツェルの渝[かわ]ることのない友情であった。ゼーシュテッテンに到着すると、もうディーツェルから送られた一冊の本が先きに届いていた。彼が特に賞讃して措[お]かなかったコルベンハイヤーの『マイスター・ヨアヒム・パウゼヴァング』である。それ以来というものの毎日、一寸した記念の品物とか手紙とか書物だとか、あるいは写真だとか雑誌とかいうように、何か彼のところから送って来ない日はなかった。その時まで、私のすべての蔵書を納めるには本箱の二つもあれば充分だったのに、それでは不足になってきて、村の建具屋に頼んで新しい書架を作らせたが、それも週一週と一杯になって行った。並んでいる書物の背金を見る患者の眼ざしはそれを許し讃えてくれるようだった。私がニュルンベルクへ行ったのは、このような美しい立派な書物を獲るためだったのだと言う者もいた。私が非常に博学だという噂が拡まってしまって、やがて以前よりもずっと多くの患者が待合室を占領した。

『ノイエ・レントシャウ』にトーマス・マンの新しい作品が現れると、ディーツェルはいつも予め電報でその重要な号を送ったと知らせてくれた。大抵電報がきた翌日、速達便で小包が届く。しかも必ず、夜分配達されないように心が配られていた。こんなことの他にもディーツェルは、私にとって最上の友であり最上の甘やかし屋であった。私の詩に対しては、私が不注意で見落とししたところを注意してくれたり、私の詩集をたくさん買い込んで、彼が愛し又有力だと考えている人々に送ってくれたりした。その一つが、エルンスト・ベルトラムのところへ届き、心から迎えられ、これが縁となってベルトラムとはその後長い交際を結ぶことになったのである。ディーツェルの熱情が、本来は造形美術に傾いていたそれだけに、こうしたことには大いに感謝しなければならなかった。彼はこの芸術のためにとうとうホップ商を止めてしまって、フランツ・マルク、リヒアルト・ゼーヴァルト、マクス・ウンオルト、その他若い画家の絵やロッテ・ブリッツェルの人形をいくらか買い込んで、ミュンヘンにサロンを開いた。私が紹介したクビンからも彼は二三優れた作を購[あがな]った。バルラッハの『北方の戦士』にこの巨匠の素晴らしい『天文学者』が加わったわけである。マクシミリアン広場の、公演地向い合った一階の、冷々とした夏の展覧会場を訪れる人は少なくなかった。しかし残念なことに、買い手はあっても極く稀だった。この事業を盛んにするためにディーツェルはニュルンベルクから美しい花瓶の蒐集を送らせて、陳列戸棚の中に装いを凝らして並べ立てたが、彼が最も愛好しているものには非売品の札を附けたのである。ところが丁度これらの非売品が、二三の外国人の購買欲を唆[そそ]って、善良な彼は少しでも売行きがあるようにそれらを手放さなければならなかった。彼の性質にはブリューテンツヴァイク氏の血は流れていなかったのだ。やがて彼は、愛好する品物を現世的意図に結びつけるといふ人間の苦悩の悉くを味い始めた。美しい珍[めず]らかな品々を心優しく守ってしようとする者と、それを売払わなくてはならぬ商売人との間にあるこうした心の矛盾は、日増しに高まって、彼には呑気なところがすっかりなくなってしまった。一向に振わない売行きも彼を苦しめたのに相違ない。何しろ彼は両親から受継いだ遺産の大部分をこの仕事に注ぎ込んでいたからである。しかし客が余り長いこと彼の愛している彫刻の前に立っていたり、その上値段でも訊ねようものなら、この懸け換えのない佳品を失ってしまいはしないかという不安のために彼の胸はどきどきするのである。『北方の戦士』と『天文学者』とにとうとう買手がついた時、彼は家へ駆け込んで声を挙げて泣くのであった。しかしやがて彼を慰め再び勇気を与えてくれたものは、当時すべて芸術に携わる欧州の若い人々の心を、次第に深く掴んで行った強力な精神運動に仕えるという感情であった。あの当時、人々の心は全く白紙に立戻り、新しい真実の愛に燃え、数世紀を超えて遙か過去の忘れられた偉大な理想を何物にも煩わされず果敢に直視しようとしていたのである。到る処から泉が迸[ほとぼし]り出で、やがて流れ入るべき本流は猶見られなかったとしても、とにかく神秘的な深みから迸る泉の音が聞こえてくると信ぜられた。そしてそのような人々の中で、ディーツェルこそは信ずること最も強く、且つ決して犠牲をいとわぬ人間の一人だった。

彼はどんなに多くの若い画家たちの孤独な行路を助けたことであろう。次第に父からの財産が減っていくことなぞは**おくび**にも出さないで、強く惹きつけられた絵には要求

された価格以上支払ったことも度々に及んだ。このようにして、数千の蜜蜂が集めた蜜は大きな蠟燭となる。すると、名の知れない神のために、感激に燃え愛に満ちた人間は、この蠟燭を一挙に燃え尽してしまうのである。当時私はディーツェルと、その常に信用出来る婦人の許を屢々訪れた。そして時につれて、家族俱共ミュンヘンへ移住しようと考えようになった。しかしどうしたものだろうと話し合っていた間に、諸国民の運命は既に恐るべき変革に向って動いて行った。あの永遠の『北方の戦士』は長い眠りから醒め、数百万の人々と共に友ディーツェルの生をも絶つことになった戦慄すべき衝撃のために身構えた。1914年の盛夏が迫っていた。

*

**

むかしまだ若かった頃、時々夢に似たある感情に幾度となく襲われたことがあった。細かいところはその都度少しずつ違っていたが、その筋路はいつも同じものだった。大抵の場合眠り込む直前にやってくる。するといつも、遠くの方から波が一つ、私に向かって押しよせてくるような気がするのである。これを避けることは出来ない、それに決して避けたいとも思わない。木の切端のように私の身体は地面からすくい上げられ、大海の中に連れ去られる。死の恐怖に駆られて気も遠くなりそうなのだが、その荒波の中はあまり居心地のわるいものではないのだ。そこには充分の時間もあれば、また空間もあった。書きもの机の上には色々な話の書いてある本が幾冊か載っている。私は落ち着いた気分で、それに読み耽る。けれども一方では、幾年かかっても読み終えまいということに気づいている。庭の小径は、外の風景のうちに通じている。そして次第に一切がなじみの深い生活の中に移って行く。しかし、この上もなく孤独に、この上もなく急速に何物かに押し去られて行くという感情は、依然として私を捉えて離さないのである。今から考えてみると、世界大戦と私との間には、丁度これに似た一種の夢のような関係があったように思われる。

思索し感受する人間、明確に物事を考えることの出来る人間は、装甲車と飛行機、毒ガス弾と殺人光線との時代にあつて、再びこの地球上に戦争を希望することはないであろう。戦争は墮落し始めたのである。ノヴァーリスなどがまだ戦争について考えていた「詩的作用」は失われて行くように思われる。あの予言者的な詩人が箴言のうちに讚美しようとしたのは、嵐のように迅速に襲来し、民族を救い、あるいは世界を解明するような戦争だけにかぎられていたに相違ないのだ。戦争の素晴らしさは、英雄精神と果敢なる犠牲心とに存する。しかしこれら二つの力は、次第にその決定的な役割を演ずることがなくなっていくらしい。そういうものは、大衆と機械とによって平坦にならされ、無駄に費されてしまうのである。だから将来にもやはりサラミスがあり得るかどうか、一箇の会戦がよく真の決定を齎し得るかどうか、戦争は依然として民族を維持し、民族を形成する力たり得るかどうか---- これこそ、今日如何なる予言者にも答えることの出来ぬ一箇の問題である。地球は狭くなりつつある。世界各国の精神相互間には無限の交換が行われ、優れたものは到るところにふりまかれる。それ故、将来他人を撃つ者は、自分自身の胚種を同時に撃ち殺すという危険に曝されるであろう。しかしかつてヘラクレイトスは正当にも、戦いを万物の父と呼んだ。そして、戦乱によって惹き起される公然たる結果と相並んで、確かにいつもまた他の諸々の作用を生ぜしめていたのである。それは人間にはそれと知られず、実際に人類が萎縮してしまわぬように、何等かの方法で戦乱の禍[わざわい]を償わねばならなかったのである。勿論一人々々の人間は、もとより常に戦争を必要としないであろう。そこで聖者や賢人たちは、自分自身の魂に巢喰う始原の悪龍の精霊と不断の戦いを続け、何等現実の敵を必要としないのである。芸術家は、自己の暗黒の魔力を明るみに持ち出し、型態へと変ぜしめることによってこれを制御し、そして予言者は恐らく、現在が泰平である時にこそ最も深く未来を卜するのであろう。ところが全人類は、もし戦魔を持たなかったとしたらばどうということになっていたであろうか。殆どあらゆる長年月の泰平によって生れてくるところの、鬱陶しくて享樂的で怠惰な空気が、戦争によって実に幾度駆逐されたことであろうか。多くの人々にとって、精神を鈍くする居心地のよいところから、清冽な死の間近へとつき出され

ることは、どんなに素晴らしい救いであつたらうか。如何に多くの情欲的で無為な窒息が一举にして吹き払われたことであろうか。自己の内部に自分の最上のものを発見するために、魂の例外的な状態を必要とする者は少なくないのだ。そして無数の人々が、出征することによって穏やかで温和な性質にされたのである。自分の村から一步も外へ出たことのないような若い田舎の青年は、戦争のために外国に赴き広い世界と故郷とに対する新しい目を開かれたのである。けれども戦争というものは、丁度我々の人生が刻一刻、詩の苦い薬味を加えられて味を増して行くように、いつも繰返し平和の有難味を確証してくれたのである。

よい意志を持っていて最高の精神をして大地の王者たらしめようと希求している我々が、実際にこの戦争という謎を解こうとして頭を悩ます必要があるだろうか。我々は一層明るい未来を予感している。しかし人生は短い。それで我々は焦慮し、錯覚に陥[おちい]るのである。我々がこの世に生きる短い年月の間に、我々は生の果実を掴もうとするが、実のところ、それは熟するのに数千年を要するのだ。あの清らかな焦燥は、若い人々にとってまことに自然である。もしこれがなかったならば、人生には何の素晴らしいものも生れてこなかったであろう。しかし自分の生活の底を見始める者は、落着いてその日の仕事を行い、且つ我々の地球の創造的な魂を信頼するだろう。地の魂は、深部において我々の身の上に何事が起りつつあるかを知っているのだ。戦いの魔神さえも、その使命が果たされてしまえば、地の魂によって呼び戻されるのだ。そしてこの魂が人間を必要とするかぎり、人間に対しては、人間の存続に欠くことの出来ぬ神聖な危険と懲戒とを送ることであろう。

*
**

大戦が勃発した時、私は丁度スイスを通してイタリアへの旅に出ようとしているところであった。ボーデンゼーのメールスブルクで船を捨てて、一夜の宿を旅館ゼーローゼ亭に求め、あくる朝はコンスタンツからシャフハウゼンに旅程を続けようと考えていた。既に暗くなりかけていたが、私は墓地の方へ登って行った。丁度二人の墓掘り人夫が、アンネッテ・フォン・ドロステーヒュルスホフの墓の蓋を開けたところだった。ラスベルクの老嬢が死んだので、明日ここに葬られるのだという。私は墓名を判読していると、低い塀の向う側から短く鋭い喇叭の音が聞え、一寸静かになったかと思うと、それに続いて一人の男が戦争の危険の迫っていることを告げているのを耳にした。これが何を意味したか、その時私は、大抵のヨーロッパの人間と同じように殆ど測り知ることが出来なかった。夕食が終ってからも一時間ばかり私は湖畔を往ったり来たりした。そして、私には世界の情勢を変更するなどということはおろか、これを見透すことももとより出来よう筈がないので、徐[おもむ]ろに自分自身の生涯を考えてみた。人生の午前は既に過ぎていた。多くの失敗を重ね、多くの力を浪費し去って、しかもとりたてていほどの仕事もなく、従って新しい生活形式に入って行けるだけの資格もないのだ。私が医業の傍ら書き上げた少しばかりのものは、勿論二三の知己を得たことではあろうが、これら二三の人たちさえも、私の書くものは決して大勢の人間に読まれることはあるまいと観ている。いや彼等が特に私を買ってくれるのは、他ならぬこの万人向きがしないという点なのだ。その上残念なことに私は遅筆という重荷を背負っているのだ。現に一度、素晴らしい原稿依頼があつた時もこれを果たすことが出来なかったのである。まだ新年のことだったが、パリのシュテファン・ツヴァイクから、ポール・ヴェルレーヌの一聯の詩をドイツ語に訳すようにという依頼を受けた。私の驚喜は途方もなかった。だしぬけに、寺院の正面にある窓を絵硝子で飾るようにと依頼された貧乏な硝子絵師だって、私以上に喜びはしなかったであろう。私は青いフランスの郵便切手の貼ってある手紙を、何時なんどきでも確めることが出来るように肌身はなさずどこへでも持って歩いた。私には、こういう依頼の結果が予測すべからざるもののように思えたのである。ほどなく書きもの机の上には、聴診器や患者名簿の間に大きな辞書類が拵げられ、その傍には出来上がった翻訳を入れておくための紙挟みが備えられた。家人は、始められたこの仕事の邪魔になるまいとつまさき立って家の中を歩く。診察を乞うてくる患者も、すげなく追い払われる。こうして二三日の間は、一切がまことに順調に進んで行くように見えた

が、ある日私は自分自身に、こういうことは一体何の価値があるのだと冷やかに言いきかせた。次から次へと自分の翻訳をゆっくりと声高に読んでみた。すると不快の念が次第々々に強くなって行った。なぜなら、成程二つ三つは成功していたには相違ないが、全体にはやはり何となく不安気な未熟なものがこびりついていて、それが他にもないこの詩人には一番ぴたりしないものだったからである。私は死生児を引き裂き、屑を燃やしてしまった。そして、依頼した人間に向かって出来るだけ落着いた言葉で、残念ながら私には今度の素晴らしい仕事が仕遂げられそうにもないからという旨を正直に言ってやった。しかしシュテファン・ツヴァイクは、事ここに立ち到った事情を幾分察してくれたらしく、その返事にも失望したような調子は少しも見られず、むしろこの私にすぐわぬことを頼んだ自分の不明を詫びて、何か別の仕事があったらお頼みしようと言って私をも自分自身を慰め、いつか一度お目にかかりたいという希望をさえ洩らしてきた。その闊達でのびのびした筆蹟からは、広大な世界と愉しい友愛の気持の息吹きが、私の狭隘な生活圏の中に吹き込んできた。こうして私は、失敗に終わった仕事のお蔭で、時代を共にする一人の人間の友情をかちえることとなったのである。その後彼が、自分とは全く異った性質の私に対して、どれほど多くの気高い援助を与えてくれることとなったか、勿論のこと私には当時まだ到底想像することも出来なかったのである。

帰郷の旅を終えて二日目に宣戦布告が行われた。牢獄が自然の異変のために破壊されて、囚人が新しい大きな試練のために解放された時にでも覚えるのではないかと思われる様な恐怖、宣戦布告は私をそういった恐怖の中に投げ入れた。まず第一にやったことは、田舎の隠遁生活に切りをつけて、ミュンヘンの住居に引移るということであった。家は、昔の黒灰色のトルコ兵營の向い側で、テレージエン街にあった。併し私たちにとって、この兵營の眺めは決して不愉快なものではなかった。というのは、その無数の窓はどの一つにも、よく繁ったジュラニウムが真紅の花を咲かせていたからである。窓の奥からは、笑ったり考え込んだりしている若い兵士の顔が覗いていた。彼等は教育のために入営しているのであった。

本屋のレームクールで私はエルンスト・ベルトラムとエルンスト・グレックナーとがこの市[まち]にきていることを聞き知った。そこで私は、まだ家具の整理もろくにしていなかったが、早速のこと当時オーム街に住んでいた二人の、質素で静かな部屋の一つに座り込んでいた。『支那の塔』まで散歩しようということになり、その日は夜遅くなって家に帰ってきたが、その時にはただ特に愉快的日を送ったという以外には別にこれということもないように思っていた。私の生活の中に入り込んできた新しいものは、まだ私には判らなかったのである。ドイツでニイチェが理解され始めて以来、より高き精神性とより深い新しい真摯さへの要求は、最早若い世代の人々が書くものの中に沈黙することがなかった。けれども我々がただ書物だけを通じてある思想を識るのと、この思想を実際の上に具現しようと努めている人間によってこれを識るのとは、全く別のことである。自[みずか]ら厳格な生活を営んでいた二人の友人は、その峻烈さをあからさまに見せるようなことがなかった。二人の持つ人間的な温か味、特にベルトラムにあっては、人を魅了せずにはおかぬフモールなどによって、この峻烈さが柔げられていたものの、然しそれは厳として存在していた。二人のどちらも強壯な健康に恵まれてはいなかった。だがまさにその肉体の弱さこそ、二人の心の眼を見開かせ、感じ易い神経を訓練するように仕向けていたのである。三人で『英国庭園』を歩いたりする時には、屢々あのだのしい、シラーによって高揚されていた少年時代が立ち戻ってくるような気持になった。過去の暗い経験などはどうでもいいものとなってきた。私は諸々の精神の偉大なる出発を感じ、勿論自分がどういうものを携えて行くかなどということは少しも考えることが出来ぬままに、その進発に与[あずか]りたいと憧れた。時代の危険は、増大していた。古い規準は、詩人はおろか美術に対しても最早通用しなくなっていた。今こそ詩人は、自分の些々たる異常な体験を珍重したり、単なる気分などに耽溺することをやめるがよいのだ。詩人にしても、その全民族の予視者、代弁者、使者、戒告者、警告者、助言者たる使命を自分が持たぬと知ったならば、むしろ沈黙するにしくはなかったのだ。こういう使命のうち、一つとして私にやりとげられそうなものはなかったが、しかし私も亦、新しい英雄時代への信念を共に頷[わか]った。そして墓石の下からは、

厳粛に私たちを強めてくれる諸々の声が聞えてきた。遊星は、遠日点[えんじつてん]において最も美しく輝くという。自分たちの悦楽や神経衰弱で娯ませてくれるような文士さえあれば事が足りるといった、だらけきった模糊たる時代の唯中に、殆ど忘却の彼方に沈んでいた星・ヘルダーリンが烈々たる光芒を放ち始めた。ヘルダーリンは、シュテファン・ゲオルゲ、グンドルフ、ノルバート・フォン・ヘリンクラート、ヴィルヘルム・ミヒェルなどによって新しく発見されたのである。中でもその美しい光を通す大気を再び創り出したのはゲオルゲであった。突如として何人もこの星を仰ぎ見た。そしてまさに大戦の最中、彼の姿はドイツの若い世代の上に輝き互ったので、一時は広大無辺なゲーテをさえ忘れ果てた者もかなりあったほどである。

ある雲の多い日、私はベルトラムの部屋に座って、本を読みながらお茶を待っていると、隣室から、一人の男の、明晰な、響き裕[ゆた]かな声が聞えてきた。思わず耳を傾けずにはいられないような、独特の幅を持つ声である。言葉の一つひとつは明瞭に聴きとれなかったが、しかし、そこには断々乎たる一人の人間が、騒々たる現代における精神的人間の立場を規定しようとしているのだということがはっきりと知られた。目顔でベルトラムに訊ねると、彼は物を言わなかったが、微笑によって、それがゲオルゲであることを確証してくれた。そこにはゲオルゲが、我々の友グレックナーに親しく口ずから教えるを説いていたのである。聴くともなく私はその声に聴き入った。語の内容は殆ど聴きとれなかったとはいえ、しかし私は『盟約の星』以来なじみの深いその全体の精神の様態を感じることが出来た。この高名な教師の揺るぎない調子と、時に口を挿む謙虚な門弟の問いと---- 街では秋の木の色が紅に燃えて静かにふりそそぐ中を、軍楽の音につれ花に飾られた新鋭部隊が、陸続として停車場に向い、フランダースの会戦へと急いで行く---- これら一切は、私がまだこのまどいを垣間見ただけであり、従って不断よりも一層強く自分の孤独と、同時にまた自分の自由とを意識してただけに、二重にも意味深く私の胸を打つのであった。のち私は文芸翰林[かんりん]院について論議されているのを耳にするたび毎に、この日のことが想い返された。そしていつも、文芸翰林院というような制度は、こういう対談から出発すべきではないかと思われた。事実ゲオルゲは、痴話を通じて助言を与えることによって、どれほど多くの有能な若い人々を鞭撻して各々の道を歩ましめ、如何に多くの人々をその各々の使命へと導いて行ったことであろうか。グンドルフ、ベルトラム、カントローヴィッツ、ヴォルフスケール、マクス・コンメレル、ハインリヒ・フリーデマン、フォン・デン・シュタイネンその他の人々の著した研究書も、もしゲオルゲというものがなかったとしたならば、今日あるようなものではなかったに相違ない。いま我々の友エルンスト・グレックナーは、普通にはただ敬虔なる中世期においてのみ可能であったような、この上もなく清純にして高貴な細密模様を以て飾られた最も美しい最も明晰な書をよくするのであるが、その彼の手を導いているのも、やはり確かにこういう対話の祝福なのである。----「またひとたび渠[きよ]を口にしたる者、永遠に渠のために飢えむ」---- 失われてしまった詩のこういう一行が巨匠ゲオルゲの形成力に想いを馳せるたびに思い出される。実際また、後になってゲオルゲに背き、彼に激しい戦いを挑んだ弟子たちも亦、ゲオルゲの偉大なる呪縛を受けていて、生涯彼のために創造し、もしくは以前ゲオルゲを崇拜していた頃に彼等を導いた、その予言を秘かに反省しつづけていたのである。自分のことを言うならば、私は既に末席を汚す弟子の一人として、ある時は若い、ある時は老いたるゲーテを友とし指導者として撰んでいた。我々は、ゲーテに墮することなく、これに信従することが出来る。よしこれに墮したとしても、依然として猶充分自由な身でいられるのだ。ゲーテは万人にその軌[みち]を照らし、しかも邪路の有難味を心得ている。ゲーテの明朗さと無邪気さに接すると、何人も気軽に振舞えるように感ずるが、形成者としての芸術家に対するゲーテの要求は、すべて他の天才のそれと同様に峻厳であり、そういう彼の秘密は最も深いのである。何人も必ずしも即座にこれに気がつかない。なぜなら、大抵の場合彼が優れたことを口にすると、それは気持さえ落着いていれば誰にでも自分から容易に言えそうな響きを持っているからである。私がゲオルゲの文学を理解し始めたのは、もう相当年輩になってからのことであつた。それにまた恐らく、余りにも自分自身の生活の空気の中に閉じこめられていたのだ。だから本当の弟子としてゲオルゲに教えるを乞うには時を逸していたわけである。また誰も、私からそれを期待するようなことはなかった。

私はゲオルゲを囲む人々の与り識らぬ領域からやってきた人間であり、またどうにかしてそういう領域から脱れ出ることを望み、私にふさわしいような助力ならどんなものでも受けようと用意していた。ゲオルゲも、私がホフマンスタールの言葉に動かされて『生の絨毯』を読み始めた日以来というもの、彼なりの助けを与えてくれた。既に久しく、ゲオルゲの詩調は、私の詩章の中に響きをかよわせていた。そして『芸術草紙』第九号の最初の幾頁かにあるような簡明な冒頭言を読んだりすると、他の人々が書いた長たらしい論文などよりもずっと教えられるところが多かったのである。

時々ベルトラムは、新しく出来上がった詩を二つ三つ持ってきて見せてくれた。それは、私たちの対話への一種の伴奏音楽のようなものだった。それらの詩は、自己の魂の開示や、また極めて身近にある事物の直接的な観照を歌うものではなく、血潮の鈍い魔神等が如何なる暴力をも振り得ない叡智者の、覚醒者の詩句であった。憂苦と愛情とのうちに倦むことなく、これらの詩章のめぐっている中心点は、即ちドイツの運命であった。これらの詩のうちに新しく見直されないような、ドイツの伝説と歴史との形姿は殆どないと言ってよく、予言的な祝福と警告との詞が囁かれぬような、如何なるドイツの風景もなかった。こういう文学こそは何はともあれ青年層に向けられるのでなければならぬ。ベルトラムが偉大な教師であることは、既にこれらの詩のうちにも現れていたが、果たして後年、彼は数千の敬虔なる聴衆に取りまかれることとなったのである。以前よく半信半疑で聴いていた多くのことも、ベルトラムによって初めて明白な、直接に強い観念となった。彼は、偉大なる諸民族が意外に短い間に地球上から姿を消してしまうという事実を余りにもありありと描いて見せることが出来るので、我々は不意に自分たちの属する民族の運命のために戦慄し始めるのであった。いやあの頃初めて私は、祖国というものを、何かその存続に危険の加えられるものとして、その同胞の忠誠に頼っているものとして認識したのである。強大な国家も僅か二三世紀のうちに瓦解してしまうというようなことは、私とても勿論世界歴史を読んでよく識っていた。だが、ドイツ帝国と雖[いえど]、やはり滅亡するかもしれない国家なのだということを思ってみるには、私は余りにも呑気者に生れついていたのである。私にとって故郷とは即ち神さまから授けられたようなものだった。それは日々のパンのように、私にとっては絶対になくなりようのないものだった。そして、まさにそのパンが薄っぺらで不味い一片々々に分かち与えられてしまうような時代が、如何に身近く迫っているかということは夢想だにしなかったのである。

なぜなら、外部には勝敗のしれぬ戦いが悪魔的に荒れ狂っていた。しかも既に、私たちがたのしい夏毎に日ねもすさまよい歩いた見渡しがたい穀物畑があるにも拘らず、ドイツ国内の土地では最早やがて住民を養って行けなくなるという噂が乱れ飛んでいた。またこの二人の友人とのたのしい教えられるところの多い交際を長いこと中絶させたのも、やはり戦争であった。私の方からそれらの出来事の方へ衝き進んで行ったのも、恐らく私の運命だったのだ。私の年の者はまだ招集を受けていなかった。しかし、招集されるまで待たずに、戦闘部隊の軍医勤務に志願すべきだという内心の声が私を唆かした。どこか後方の衛戍[えいじゅ]野戦病院で働かされるというのも、余り気の進まぬことだった。当然のことながら、ミュンヘンの軍医局は、戦争経験のない者をいきなり前線勤務につかせるのを拒んだ。そこでまず予備教育を受けることになったが、これが絶対に必要だったということはほどなく納得が行った。アウクスブルク歩兵第三連帯で教育されたのだが、健康な肺で呼吸し強壮な心臓が鼓動するといった健康な人間相手の仕事ばかりといってもよかったので、それだけでも既に愉快だった。その上暇も充分にあったので、素晴らしい噴泉が音を立てているこの古都を知ることにも出来た。この市には昔、裁判官だった祖父がいたこともあり、母もこの市の僧院女学校マリア・シュテルンに通っていたことがある。近くのゲッギンゲンには、快活で善良な、農民風のしっかり者の友だちがいた。そういう人々は、もう一度私の魂の前に侵し難いドイツというものを描き出してくれた。それやこれやで私は、自分がそこにいる本来の目的を暫くは殆ど忘れ果ててしまい、何時もいつも母親のことが憶[おも]われてならなかった。母は一生涯、シュヴァーベン土地と人間とを此の上もないもののように誉めていたのである。

愈々ヨーロッパの戦場に向って出発する前に、私は一つの祝福を受けることとなった。ライナー・マリア・リルケに出会ったのである。独特な力強い詩や物語を書いて当時既に世間の注意を惹いていた若い閨秀詩人レギーナ・ウルマンに励まされて、私はリルケが大抵午後の時を過すアトリエに彼を訪問することとなった。もう話が通じてあるから、事改めて訪問の通知をするには及ばないということであった。私とその家の前に着いた時、リルケも丁度家に向ってやってきた。彼は、鋭いけれども全く放心した眼差しで私を見た。訪問をのばすことは、最早礼を失するよう思われた。なぜなら、実のところは出来たらそうしたかったからである。濃紺の服を身につけ、黒の柔らかな帽子をかぶり灰色のスパッツを穿[うが]ち、両手を後に組んで路を横切ってくる何の変哲もない弱々しい男は、人が話しかけることなどということの到底許されぬ状態にあるように思われた。通りすがりにちらりと彼に眼を止める人ならば、きっとどこかの平凡な気難し家が生活に疲れて自分の侘しい住居に帰って行くのだと考えたに相違ない。近寄るにつれて、彼の眼の虚ろな光が目立ってきた。いつだったか死にかけている大きな野の鳥を見たことがあるが、リルケは私にそれとよく似た印象を与えた。非凡な仕事に身を捧げつくしている一人の人間がやはり人波はずれて疲労しているように見えるということは不思議ではなかった。のみならずもし私が、後に『ドイノの悲歌』として評判になったあの勝ち誇った哀傷の声が既に当時リルケの内部に鳴り響き始めていたことを知っていたならば、彼の外見はもっとよく私に納得の行ったことであろう。ああいう文学を書く者は、何時も真珠採りのように、自己の魂の奥底に幾度も下って行かねばならないのだ。そして、上層の圧力のために押しひしがれ、帰路を誤るという危険を冒すのである。

私たちは、避けようもなく真正面から向い合ってしまった。彼の前に立った時の私の気持は、何か不正なことでもするような、おぼつかないものであった。私が帽子をとると、実際にリルケは不安げな不機嫌な身振りをした。だが私の名前を聞いて気がやすまって、真珠を求める深海から、容易にまた水の面に浮び上ってこられたらしいのを見て、私もほっとした。この瞬間、彼の瞳は言いようもなく碧[あお]かった。そこからは明るい光に満ちみちた眼差しが、突然子供のように満足して、名状もし難いようになごやかな眼差しが送られてきた。彼は手をさしのべて、ずっと昔からお知合いだったような気がすると言った。一緒に五階のアトリエに上っていく間に、私がまだ彼の文学に、本来ふさわしいほどに完全になじんでいないということ、のみならずひと頃は万人がリルケの模倣をし、そういう詩以外のものは何でもお構いなしに否定するといったあの流行に路を誤って、むしろリルケの詩を避けていたということ自分を白状しないわけには行かなかった。学校時代以来、新しいものの沢山読みはしたが、ホメロスやシェイクスピア、ゲーテ、それから時々カール・ヴィッテ訳のダンテなどを繰返し読んだものだった。私の青年時代を養ってくれたのは、ゲーテの核心的な星のような言葉だった。ミニオンのような姿は幾度絶望から私を救ってくれたかしのない。私はこの精神に自分を置いて、現代の掲げる数々の要求を彼の要求と比較してみた。けれども、リルケの詩の呪縛にかかった者が、このさきぎきゲーテなどは好んで棄てようとするばかりか、これを否定し非難するようなことも幾度があったのである。それは、庭に新しいとてもきれいな薔薇が綻び始めたので、もうこれからはその薔薇ばかりを丹精し鑑賞して、陽あたりのいい格子壁一杯に広がっている高貴な、房を沢山つけた葡萄の木株などは手入れをしたり保育したりする値打ちがまるでない、とでもいうようなものであった。『時禱書』さえも、こういう私の秘かな反感を全く打負かすに足りなかった。しかし、リルケの初期のものの中では一番美しい、そして一番大胆な『形象の書』を私は識らないでいたのだ。一体リルケはどういう人間であるかを、初めて私に感じさせてくれたのは、あの素晴らしい二つの鎮魂曲の詩であった。この偉大なる哀悼の歎きは初めのうち時にはハムレットの如く、時にはホフマンスタールのアルケステイスのような響きを伝えた。しかし一行々と読み進むにつれて、やがて何か別のものが、独自のものが益々力強く私に響きかけてきた。即ち偉大なる至福の諦念による死の悲しみの克服、新しい人間性の悲劇的な声それがそれである。そうすると私には、『マルテ・ラウリーツ・ブリッグ』を読むだけの用

意も出来上り、そしてその中の最も重大な幾頁かを読んで、まさにその頃私を襲ってきた幾多の困難を遠ざけることが出来たのである。意想外の調子、恍惚たらしめるかと思ふとまた苦しめるような比喻の見も知らぬ光輝、あらゆる市民的な束縛から解き放たれた者、孤独なる者のみが敢てし得る厳しい「最後まで考え、死後まで見る」ということ、これらすべては、まさしくそういった拘束が私にとって放ちやり難いものとなっていただけに一層強く私を動かしたのである。後になってホフマンスタールは、『新詩集』を読むようにと言ってくれた。そして今や詩人と向い合せに、テレピン油の匂いのしみ込んだ明るすぎる画家のアトリエに座っていると、まさにどういう意味からも新しいこれらの詩の形象が活々として眼前に浮かび上がってきたということは、当り前すぎることであった。このアトリエにあるものは一切、部屋の主であるルールー・アルベール・ラザールの非凡な精進を物語っていた。四方の面は完成した絵や描きかけの作品で一杯になっている。二三は、意味あり気に壁に向って伏せられている。しかし、詩人がこの部屋に座っているので、どの絵も完全にもものを喋ることが出来ないといった風であった。今の場合に関するかぎり、これらの絵の役割は、客として招かれている者のうちに、あの色鮮やかな詩の芸術に対して一層深い意味を呼び起すことだけにあるようだった。素晴らしい肖像画や風景画をよく見ようとする度毎に、画布と眼との間には、『ギリシャ舞姫の墓』や、『豹[ひょう]』や『メリー・ゴー・ラウンド』あるいはまた偉大なる『聖母讃歌』の忘れ難い面影が浮び上がってくるのである。

自分の身を物陰に置いて、一切の光を遠い事物に投げかけ、あるいはまた話の中心になることがリルケ自身よりも煩わしくないような一座の誰かに焦点を合すというのが、リルケの真似の出来ぬやり方なのであるが、彼と話をしたことのある者の多くは、こういうリルケ話しぶりを誉めている。自分旅行の話などをしても、自分自身を全く話の中から追い出してしまふ。スペインやロシアや、あるいはまたエジプトの風景を描き出す彼の静かな照明力を味ったのしい想いをするが、だがそういう素晴らしい話は結局のところ、ただ彼の詩が生い育ってくる魂の深淵を隠すのに役立つだけなのではないかと、後になって初めて疑いの心を起す。

ところが実際に談ひとたび彼の書物に及ぶとなると、詩の門外漢や古い観念に囚われている人々は実に奇異の感に打たれざるを得ないのだ。なぜなら、リルケはいつも、靈感などというものはまるで問題にならず仕事は一切だとも言うように、文学の話をしているのに丁度何か手仕事について話をするというような具合だからである。聴き手の方にも自分の心と同じような内面の音楽を前提とするといった話し振りなのであるが、確かにそれは多分に彼の親切、彼の高貴な礼譲に発するものだった。とはいうものの我々はやがて、リルケが自分の制作をいつもただ手仕事のように考え、セザンヌが画作の過程について語ったといわれているような謙虚な調子で、生れ出る言葉について語っている時、彼にとってはそれがどれほど真剣な問題であるかが感ぜられるのである。有難いことに私は、既にかなり時を逸していはしたものの、リルケを理解出来る洞察の一段階に到達していた。ピンドロスのような詩人がギリシャの魂から無数の讃歌をうたい上げた、あの偉大な神の光に燃えるような黄金時代は最早去ってない。そしてヘルダーリンがドイツ人たちの間にあって、何かそれに似たようなことを始めた時、彼は狂気の襲うところとなった。僅かばかりの友だちに護られて、今日リルケは目覚めすぎた夜と昼とのうちを歩んで行く。詩人の夢を護る薄明の世界は最早存在せず、詩人を過度に高め、その明るく万物を見はるかす眼を、どぎつい眼にしてしまおうとする悪霊が到るところに詩人を窺っている。詩人はその魂の命令を果たすためには、ただに英雄的な忍耐を必要とするのみならず、また神聖な詐術をも心得ていなければならぬ。その上にまた、余りにも夙[はや]く見知られぬためには、暗号をもって始めなければならぬということも必然の勢いであろう。地下の泉に触発されるという魔法の小枝は、恐らく詩人の手の中にも激しく動くのであろう。しかし、日常世界と歌声の湧き出でるあの深部との間には、部厚い固い地層が横たわっている。そして、水を掘りあてるには、ここかしこ長いこと掘ってみなければならぬように、今日では無数の試掘の結果、張りあてたのが水の涸れた泉だったということもあり得るのであろう。リルケは若かった頃、驚くほど容易く詩を書くことが出来た。彼はかつて、『時禱書』の詩風はその後も続けようと思えば

長く続けて行くことが出来たのだと語った。だが月日が経つにつれて、自己の携わる芸術に対する彼の要求は大きくなって行った。彼は、より深くさぐり、より深く見ようとしたのである。一本の樹木、一匹の動物、一体の彫像、一人の人間、あるいは昔から言い伝えられている伝説の人物を、突如としてそういうものの本質的な姿が自分の眼前に浮び上ってくる時まで幾度も繰返し、また深く見詰めるということを教えてくれたのはロダンだったと彼は言う。私は、こういう方法を全然知らないわけではなかった。以前目にふれた人智学の小論文も、それと同じことを論じていた。だがそういう精神訓練は、余りにも面倒で退屈だと思ったので、自分でやってみようという気が起らなかった。それに私は、そういう態度は静止している事物には適用されるが、激烈に動いているもの、特に人間には到底妥当しないものだと考えていた。人間の上には、狼狽してなすところを知らぬような大事件を齎す運命が襲いかからねばやまぬ。人間はそういう運命に際会して初めて、我れともなく、忘れ難い態度や、切羽つまって口をつく言葉や、自分の秘奥のものを現す深いかすかな溜息を洩らさざるを得ない。いわば自己の生命の流れをせきとめ、一つの作品を完成するということは、恐らく頭から私には不気味に思えたのである。そういう態度のうちには、我々ドイツの夢想者の世界の中に流れ込んできた何か東方的な異質のものが存在するように思われた。それは、最早無邪気に、歌をうたっている自然を自己の内部に宿すことなく、むしろ意志の力に訴えて自己の光線を魂というレンズを通して一点に集約し、この一点が歌いつつ燃焼し始めるまではやまぬという瑜伽[ヨーガ]の精神である。----「物を見るということは素晴らしいが----物であるということは怖ろしい」---- 当時既に、この怖るべき仏陀の言葉も欧州のうちに響き渡っていたのである。私にはまだこの言葉の意味がすっかり判っていなかった。勿論、老ゲーテを読んでみると、彼は夙々の昔にこれを識っていたように思えるのであったが、ただゲーテは神々に似て流れて行く水鏡の如き静けさを守って失わず、無理な努力を避けていたのだと思われてならなかった。

こういう沈潜がもしある魔神の導きの下に行われるならば、どんな奇蹟が生れてくるものであるか、リルケの素晴らしい詩章に接して我々が清らかなたのしさをもって体験するのはこれである。しかしそういう奇蹟は、全く一回的な形象であり、高貴な蒸溜物であって、リルケであればこれを獲ることが出来たのであるから、その模倣はどんなものでもいたくリルケの心を傷つけた。こういう体験のためにどれほどの犠牲を支払わねばならなかったかを知っていたのは、もとよりひとりリルケあるのみであった。そして彼は、他の何人よりも深く、これらの体験の繰返し難さを感じていたのだ。自分の内部の視力を容赦なく酷使することによって、恰[あたか]も高等数学でもやるようなつもりで文学をやろうとする凡才は、誰しも万有の流動する諸々の力から切り離されてしまうという危険に曝されやすいものである。そして、あの『ドイノの悲歌』なども、あるいは生命を維持して行くために不可欠な器官の一つ犠牲にすることによって初めて生育してきたのではあるまいか、これは時々医者としての私の心を捉える一つの疑問であった。

どういふ意見にあっても、一番問題になるのは、誰がその意見を吐くかということである。まさにリルケこそ、誠実に自己の軌道を他人に示し、自己の労苦について語り得る人間だということを理解するには、ものの十五分も彼と席を俱にすればよい。彼と一緒にいて少しも束縛感を覚えぬということも、これと関係がある。彼は教えもしない、要求もしない、強制もしない。あらゆるたたかいは、既に夙く寂寥の時間に彼によって行われていた。招かれてその卓に座る客は、獲得された諸々の地域の光輝と充溢[じゅういつ]のみを見ればよかったのである。

今日、詩というものがリルケのように大きな恵みを授けられている人間、世間的に拘束されるところのない人間にさえも、最早決して易々と生れてくるものでないということは、恐らくある深い掟にかなっていたのだ。単なる才能からではなく、生命を持った萌芽から生れるものは、大抵の場合その生育に長い期間を要するのである。各人が自分の発達というものを振り返ってみれば、これがよく判るであろう。御多分に洩れずこの私も、学生時代には結婚式の祝賀詩を書いたすぐあとで追悼の詞を書き上げることなどは、一晩のうちに楽々とやってのけたものであるが、古今の詩人に警[いまし]められて、内

他の人々が長年かかって徐々に築き上げたものの悉[ことごと]くを壊してしまうように描写されている時、これを素朴な原始性と呼ぶのである。勿論そういう動物的な人間は、少々ばかりの暴力を揮[ふる]い、殺人を犯し焼き払ったりすることは出来よう。しかしそういう人間の手によっては何も動かされず、何も創[はじ]められず、何も築かれはしないということを残念ながら人々は見落しているのだ。シェイクスピアは、夢のように軽やかでいながら、嵐と戯れ、歌をうたいながら運命を左右する風の精アリエルを描き出したが、彼はその時、素朴で原始的なものがどれほどかそけく音楽的にその身を外に現し得るものであるかを十分に承知していたのである。リルケは、なべて混沌の淵近く住まう者のように、不断に何物かに脅かされているような感情に悩み苦しんでいた。極度に敏感で、健康にも自信を持たなかった。彼は自分の芸術を、天候が悪いとすぐに狂いを生ずる高価な提琴のように取扱わねばならなかった。時にはまた、自分自身の中心点から逸[そ]れはずれてしまいはせぬかという懼れが途方もなく大きなものになってきた。すると彼は足をとどめ、自己の掟に耳を傾けるのであった。我々が後年識ったように、これが即ち訓練で満たされた彼の休止期だった。時には相手に向って書くよりも自分のために認めた手紙や、日記の中において、彼は自分の本質と自己の天職とを打開く鍵を求めようとした。リルケと親しかった人々の間では、その手紙のことがいつも大いに問題にされてきた。表現力や美しさの点にかけては、詩に劣らぬものも少くなかった。時折リルケの手紙が一つ二つ朗読されることがあった。そして、後に印刷されることとなった手紙の非常な豊富さについては、誰もまだ少しも知らなかったとはいえ、既にそういう僅かな書簡のうちにも、無数の衣をまとったこの独自の情熱的な精神が開示されていた。ある時は詩想の熟する時を待ち、時折習作風に風景や庭園、衣服などを短い言葉で驚くほどありありと描き出すことにやって、歯を喰いしばって忍耐する造型者としてのリルケ、無限の財宝を一瞬間から汲み取ってこれに忘れ難い表現を与え永遠のものと化する深遠な認識者としてのリルケ、それから又、なぜ自分がこの現世のあらゆる無邪気な悦楽から完全に閉め出されているのかがどうしても理解出来ないで悲しんでいるリルケ、更に又、人間や出来事を彫刻的なフモールによって照らし出そうとする果敢な勇気の持主としてのリルケ、いや時には、仕事が齎す収入を非常につつましく前以て計算して、細かにあれこれと算段を立てる文筆家としてのリルケ、しかし常に、深部から響いてくる諸々の声を聴き洩らすまいとして、安楽を味わせるような家庭的な幸福を一切避けるところの、過酷なまでに自己の使命を意識した芸術家としてのリルケ、そういう色々の面が僅かばかりの書簡のうちにも窺われたのである。無数の苦悩と遁走との唯中におけるこういう尊厳と、こういう王侯のような態度、これが最も美しく輝き出ているのは、彼の許に助言を求めよる年若い弟子の眼を最後の秘密へと向って開き、あるいは親切にまた厳粛にその人間自身の魔神を指し示してやる時である。そして、このさまざま不安に苦しめられ、時にはよく自己の弱味すら告白する詩人の、作品のうちにも書簡のうちにも、どこにも我々疲れた卑怯な不安定な言葉を一つだって見つけ出すことは出来ないのだ。リルケが遺したどんな小さな報告の背後にも、仕事に全生活を捧げ、この仕事のために最も大きな人間的な自由には敢て手を触れようとしなかった一人の人間が立っているのである。それでもまだ、この詩人が英雄的な人間だったとは言えないのであろうか。

あの絵の沢山かかったアトリエで、リルケに対座していた時、私はまだかれの戦いや苦悩や疑惑については殆ど識るところがなかったのだ。彼こそは、私に較べるならば自由で幸福で、時間の余裕なども充分にあり、ただ自分の幻想だけに縦[つ]いて行けばそれで済んでいる人間だというように思われた。自分にはどこにも住むべき家がないと言ってリルケが嘆くのを聴くと、私にはそれだけ一層彼が羨ましく思われた。その人にとっては常に一切が新しく、その人が訪問に値すると考えた家はその最も美しい面を開き示し、しかもその人に数々の義務を押しつけることがないといったような永遠の賓客がリルケであるように思われた。こういう生活様式こそ、まさに私のそれとは正反対のものだった。なぜなら、私を待ちもうけている家々は、私の気に入らうなどとは絶対にしなかった。逆に私はいつもいきなりその家の中の一番暗い傷[いた]んだところへ連れられて行くのだ。しかし私はリルケの傍にあって、そのことを思い出すまいとした。そして、自分が従事している職業というものを何かあまりまとまな商売ではないかのように

思いなして、たとえ一時[いつとき]でもそれから離れ、リルケとともに世界や自然や芸術を語り、よく私が想い描いていたような詩人同士の対談というものに時を費すことが出来るのを心から悦んだわけであった。その時私は、リルケが徹頭徹尾与える人の側に立っていたことに殆ど注意を払わなかったので、少々お返しをしていたきたいものだと言われていささか驚いた。というのは、そのお返しというのが、他ならぬ私がその時最もつまらぬことと考えていたものだったからである。彼は微笑のうちに白状した。自分はドクター・ビュルガーの日記を読んで以来、私がどういう風にして患者に接するか出来るだけ詳しく知りたい、いやそれどころか、からだに色々と故障もあるので、ぜひ一度直々[じきじき]私の診察を受けたいという望みを捨てられずにいる、というのである。これほどの信頼がどんなに名誉のあるものであるかは、決して私にも判らないことはない。しかし私は、一寸した精神的なこだわりのために、こういうリルケの願いの裏にはどんなに素晴らしい使命が隠されていたかを咄嗟に呑み込めずにいたのである。いや何より私は自分の腕前を信用していなかった。病める詩人、それは当時の私にとって、暗い太陽を意味していた。その上、リルケのような人間の肉体を、誰か他の人間の身体と同じように簡単に考えることは不可能だった。リルケを診察することを私は一つの大きな冒険のように考えた。出来ることなら、これは私などよりも他の誰か適任者に任せかけた。結局私は彼の注文を一種の儀礼と解釈した。それで、ルー・アンドレアス＝サロメとルールー・ラザールが部屋に入ってきた時、二人がすぐにも話頭を転じてくれればよいがと願った。やがてレギーナ・ウルマンもやってきた。私はウルマンが話をする時の優雅で泉のように湧き出る話し振りを思い、あの物語の精霊が火のような舌で彼女にさっと襲いかかればよいがと一心に念じた。けれども彼女はまず、白い薄葉紙から一束のうめもどきの枝を取り出し、これを活ける花瓶を求めた。橙色につややかな実の塊は、ほんの僅か灰色がかかった白い葉のさきを見せて、見かけほどにはしっかりと枝についていなかった。真珠玉のような実が沢山落ちてウルマンの僧衣めいた黒い服にひどい染[しみ]をこしらえた。女詩人はまずこの染をおとすのに大童[おおわらわ]になった。彼女はその日いつもよりいくらか口が重いといった風で、輝くような枝を活けながら、その場の話の模様を露知らず、リルケの願いを支持するかたちになった。というのは、つい二三日前私の診察を受けにきた旋盤工の小さい病気の娘の話をしたのである。それは余り類のないケースだった。そして、リルケは大きな関心を示して話に聴き入った。彼は私に色々と質問を浴びせかけながら、私を説明させたり解明させたりしようとし、私が細かに分析していく興味深い病歴を、静かななにかを聴くような敬虔な面持で聴いていた。話が進むにつれてリルケは次第に厳粛に静かになって行った。そして突然、虚ろな微笑を浮べて、「医業というものは、やっぱりどんな仕事に較べても一番はっきりしていて美しく、恵みを授かったものなのですね。自分も若い時には医学を勉強しようと思ったものです。今からでもまだ遅くなければよいと思っています。」と語った。

すると沈黙がこの詩人の言葉に続いた。これらの言葉を耳にした者は、恐らくこの願望の深遠な意味を尋ねなければやまないであろう。けれども確かに何人にもこの願望が果たされ得るものだとはいえられなかったのである。この自己の使命の神聖な囚われ人に果たして市民的な仕事への遁走が、たとえそれがどれほど無理のないものであっても、許されているのであろうか。これは何人の眼にも明かに不可能事なのであった。三人の婦人は、かなりはなればなれに席を占めて、ぼんやりと前方を見つめ、各々の追憶の書を繰っているかのようにであった。三人が三人、どんなに違った人間であるかを思うと、私は奇妙な気がした。しかもこの孤独な詩人の力強い呪縛がこの三人をお互いに固く結びつけているのだ。だが私にとっては、つい今しがたまではあまり有難くも考えていなかった医者という職業がリルケの言葉によってふたたび親しみやすいものに変ってきた。別れの挨拶をするために腰を上げて、私はこれを口に出して彼に告げた。リルケは、人を驚かしてやろうとしている者のような微笑を浮かべ、もう一寸待ってくれと席におしとどめてから、紙挟みや書物の入っている小さな戸棚から何か取り出した。彼が手にしたのは、意外にも私の小さな緑色の詩集だった。彼はそれを開き、次第にうすれて行く窓明りの中に立って、私が若い頃書いた『朝行かば』という、かなり平均のとれていない詩をゆっくりと深い余韻をこめて、既に黄昏の気配の漂い始めた部屋の中に向かって朗

読した。すると、不思議に広やかな気持が沸き起ってきた。そして、ついさっき私を医師という日々の務めに新たに振りむけてくれたのと同じように、彼はいまその浄化するような朗読によって、不安気にきらめくリズムの塊りを、本当の詩のように、あらゆる欠点を払い落して作者の手に渡してくれたのであった。

あかりのついた街なみを帰路につきながら、私は以前よりも固く決心して、第一戦勤務への詩短距離の道を求めようと思った。「蛇の口より光を奪え！」数ヶ月前からこの意味深い言葉が私を呼んでいた。あの戦場に立って、何等かの深い価値を自分の内部に発見しようと望んでいるのは、確かに私一人ではなかった。ところが今また諸国の事情に明るいろルケは、遠いところへ行ってみたいという昔からの私の衝動を更に強めてくれた。そして、この衝動を満足させる途は、往年のドイツ人にとって、ただの一つしかなかった。既にその間、ミュンヘンの軍医局は私の希望を叶えていてくれた。あくる朝、私がアウクスブルクの、古めかしい暗い歩兵連隊営舎で日頃の勤務につこうとした時、机の上には、北フランスへの出動命令状が置かれてあった。